

田道町遺跡

— A地点発掘調査概報 —

1992

石巻市教育委員会
株式会社 旭産商

田道町遺跡 A 地点発掘調査概報 - II 三井表

頁	行	誤	正
例 言	5	…国土地理印…	…国土地理院…
調査要項	18	_____	梶原 英樹
7	19	…が混入している…	…が混入している。…
9	断面図	B B'	B' B
9	観察表 5層	炭化物を少量含む	炭化物を少量含む
9	観察表 6層	…炭化物を少量含む	…炭化物を少量含む
20	4	(遺構確認)	(位置)
23	断面図	A _____	A' A''
25	3	(重複) 第18号住居…	(重複) 第17号・第18号住居…
32	観察表 P9 3層	黄褐色土砂_____	黄褐色土砂を含む
34	4	…の破片が…	…の破片を…
38	8	…が3基が確認され、…	…が3基確認され、…
38	12	…確認された。〔重複〕…	…確認された。 (改行)
43	観察表 1~4	土塊出土	土壤出土
44	18	…円錐台状を呈した、…	…円錐台状を呈し、…
44	19	…球形を呈した、…	…球形を呈し、…
46	2	1. 田道町遺跡C地点は…	1. 田道町遺跡は…
50	写 真	第 <u>1</u> 号住居跡	第2号住居跡
50	写 真	第 <u>2</u> 号住居跡	第1号住居跡

序

仁徳天皇五十五年に上毛野田道が蝦夷と戦い敗死した伊寺水門は、古来石巻であると信じられています。もとよりこのことは史実そのままでありません。しかし、この上毛野田道にちなんで名付けられた田道町には、その命名の由来にふさわしく、古墳時代から平安時代にかけての遺跡があります。

平成2年この田道町遺跡の隣接地での宅地開発計画の協議があり、現地踏査を行ったところ、土器片の散布が確認され、田道町遺跡がその付近まで広がっているものと推定されました。そこで、平成3年に事業者負担で発掘調査を実施いたしました。

文化財は、先人の残した貴重な文化遺産であり、石巻に生きた人々の生活のありかたを語ってくれるかけがえのない資料です。これまで、石巻市の古代遺跡は、五松山洞窟遺跡を除いて、ほとんど未調査であり、石巻の古代は謎に包まれたままでした。この発掘調査により石巻の古代史を多少なりとも解明することができたら幸いと思います。

この発掘調査にあたり特段のご配慮を賜った株式会社旭産商、地主の今野勝樹氏とご家族の皆様、調査にご協力をいただいた各氏・各機関に紙面を借りまして感謝申し上げます。

平成4年8月

石巻市教育委員会教育長 阿 部 宏

発刊の辞

石巻市には国指定史跡沼津貝塚に代表される数多くの遺跡があります。そのなかでも田道町遺跡は古墳時代から平安時代までの遺跡として知られています。

当社が、この田道町遺跡の近くで宅地開発を計画いたしましたところ、計画地まで遺跡が広がっていることがわかり、発掘調査を実施することとなりました。

調査の結果、古代の住居跡29軒をはじめ、数多くの遺構遺物が発見されたとのことです。

石巻市において、発掘調査の専門職員を配置した初年度の最初の調査となったということも聞き及んでいます。

この度、その発掘調査結果の報告書が刊行されることとなりました。当社がこのような形でかかわった発掘調査の報告書により、石巻地域の古代史の研究に役立つ貴重な資料が永く残ることは誠に意義深いものがあります。

最後になりましたが、この調査を実施していただきました石巻市教育委員会、ご指導を賜りました宮城県教育委員会、地主の今野勝樹氏に厚く感謝の意を表します。

平成4年8月

株式会社 旭産商
代表取締役 本郷耕志

目 次

I	発掘調査に至る経過	1
II	環境と立地	1
III	発見された遺構と遺物	3
1.	基本層位	3
2.	発見された遺構と出土遺物	7
3.	掘立柱建物跡	31
4.	溝 跡	36
5.	土壙・井戸跡	38
6.	その他の遺物	44
IV	ま と め	46
V	写 真 図 版	47

例 言

1. 本書は、株式会社旭産商の宅地開発に伴う田道町遺跡の事前調査の概報である。
2. 調査は、石巻市教育委員会が主体となり、石巻市教育委員会社会教育課文化係が行った。
3. 土層等の色調表記については、『新版標準土色帳』9版（小山・竹原：1989.5、日本色研株式会社）を利用した。
4. 本書の第1図は建設省国土地理印発行1/25,000「石巻」を複製して使用した。
5. 本書の編集・執筆は石巻市教育委員会社会教育課文化係芳賀英実・佐々木淳・岡 道夫が行い、遺物実測図は木暮亮が作成した。
6. 出土した遺物および調査記録類は石巻市教育委員会で保管している。

調査要項

1. 遺跡名 田道町遺跡A地点
2. 遺跡所在地 宮城県石巻市田道町二丁目
3. 調査対象面積 2,200m²
4. 調査主体者 石巻市教育委員会
5. 調査期日 平成3年4月10日から平成3年8月23日
6. 調査員 石巻市教育委員会社会教育課
佐藤 淳 佐々木 淳 芳賀 英実
岡 道夫 木暮 亮
7. 調査指導 宮城県教育庁文化財保護課
佐藤 則之 菊地 逸夫 古川 一明
吾妻 俊典 齋田 忍
8. 発掘作業員 相沢利喜子 秋沢ちよ子 大沼 忠雄 勝又 正男
亀山美代子 小泉久美子 小泉 文男 穂田 吉夫
西條 芳子 酒井 清與 佐藤ゆきの 鈴木 友春
高橋 盛雄 長谷川信雄 松川 利克 八島 寛
渡辺キミ子
9. 整理作業員 相沢利喜子 伊藤 力 海老沢 洋 西條 芳子
関根 正美 目黒たみ子
10. 調査協力 宮城県教育庁文化財保護課 東北歴史資料館
石巻文化センター 石巻市建設部道路課 石巻市総務部総務課
株式会社旭産商 株式会社木村正友設計事務所
今野 勝樹 桑原 滋郎 藤沼 邦彦 白鳥 良一
小井川和夫 阿部 博志 佐藤 敏幸 中村 光一
三宅 宗議 茂木 好光 佐藤 雄一 木村 敏郎
石塚 和雄 鈴木 東行 川名 紘一 石垣 宏

I 発掘調査に至る経過

平成2年12月、民間企業による宅地開発の事前協議が、建設部都市計画課から石巻市教育委員会にあった。田道町遺跡及び横堤遺跡の隣接地であったため教育委員会社会教育課文化係職員が、12月18日に現地踏査を実施したところ、土器片の散布を確認した。そこで都市計画課に対し、宮城県教育委員会と早急な協議が必要である旨を回答した。

平成3年1月18日、事業者から宮城県教育庁文化財保護課長あて協議書が提出された。協議の結果、4月上旬から事業者の経費負担で遺構確認調査を実施することとなり、4月10日に調査を開始した。

調査を開始してすぐ、土壤や竪穴式住居跡等多数の遺構を検出した。そこで事業者・宮城県教育委員会・石巻市教育委員会の三者で遺構の保存について協議したところ、造成計画地のうち道路となる部分及び表土が薄く遺構の濃密な部分約2,000平方メートルについて記録のための発掘調査を実施することとなり、その他の地区は盛土して遺構を保存することとなった。そこで確認調査に引き続き事前調査に着手した。

発掘調査は東区と西区に分けて実施し、東区は全面発掘を行い、西区は道路予定地を中心にしてトレンチを設定して調査を行った。

II 環境と立地

田道町遺跡は、JR東日本仙石線陸前山下駅の東側の住宅街、石巻市田道町一丁目から二丁目にかけて存在する遺跡で、標高1.5から1.8メートルの沖積平野の微高地上にある。

田道町遺跡は、古墳時代から平安時代までの土器が散布する遺跡として知られ、過去には南小泉式の土器器壺の完形品も出土している。今回の調査区から南東約200メートルの地点で、昭和51年（1976）1月に当教育委員会が遺構確認調査を実施している。その結果、古墳時代から平安時代にかけての「溝状遺構」・「土壤状遺構」をいくつか確認している。

東側約500メートルには墨書き器が出土している清水尻遺跡があり、西には隣接して横堤遺跡がある。清水尻遺跡は、8世紀後半以降の牡鹿郡術とする説のある遺跡である。

田道町遺跡は、石巻市西部の平野部に位置する。本遺跡の北約1キロメートルのところで南流してきた北上川が東向きを変えている。北上川は、その後再び流れを南に変え、本遺跡の南東約4キロメートルのところで太平洋に注ぐ。南東約500メートルには標高50数メートルの鷄山丘陵（日和山丘陵）が聳え、約3キロメートル南は海岸であり、仙台湾の支湾である石巻湾に面している。

本遺跡付近の地層は旧河底をうずめた堆積物で、下位から、蛇田層・釜層・沼向層・中峰

層・雲雀野層である。このうち中坪層は、河川の氾濫時に堆積した砂泥による自然堤防であり、本調査で地山と認定した層である。

微地形区分図によれば、本遺跡付近は、発達した自然堤防と後背湿地となっており、今回の調査地点は、そのうちの後背湿地部分である。しかし、昭和30年代の航空写真を見るかぎり、本遺跡のエリアは全て微高地となっており、本遺跡は、自然堤防上に立地すると考えられ、少なくとも今回の調査地点付近まで自然堤防とみなされる。このことは、今回の調査区東端で旧地形の落ち込みを確認していること等とも符合する。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	田道町遺跡	古墳・奈良・平安	8	水巣寺貝塚	縄文・奈良・平安	15	新西古墳	古墳
2	清水尻遺跡	古墳・奈良	9	梅ヶ丘窯跡	奈良・平安	16	新金沼遺跡	古墳・平安
3	横堀遺跡	縄文・奈良・平安	10	石巻城跡	中世	17	竹下船跡	中世
4	明神山下貝塚	縄文	11	五松山洞窟遺跡	弥生・古墳	18	水貫山遺跡	平安
5	明神山経塚	近世	12	漆小学校遺跡	奈良	19	箕輪山貝塚	奈良・平安
6	明神山遺跡	平安	13	西三軒屋遺跡	古墳・近世			
7	羽黒山遺跡	平安	14	筆東古墳	古墳			

(註)宮城県教育委員会 宮城県文化財調査報告書第125集 宮城県道路地図 昭和62年「第58番石巻」に掲る。

第1図 田道町遺跡周辺の遺跡

III 発見された遺構と遺物

1. 基本層位

今回の調査は、西調査区と東調査区の2つに分けて調査を行った。標高は約1.4mであり、地山までの深さは西調査区で50~90cmあり、地山面は調査区の東側はほぼ平坦であるが西側で緩やかに落ちこんでいる。東調査区の地山までの深さは西区と同様50~90cmであり、地山面は西側がほぼ平坦で東側が落ちこんでいる。地山までの堆積層は西区で基本的にⅢ層に分けられ、東区はⅣ層に分けられる。ただ、どちらの調査区も地山まで耕作等による攪乱がおよんでいるところが多く、失われている層もあると思われる。基本的に西区・東区の層位は同じと考えられる。

[第Ⅰ層]

第Ⅰ層は耕作等による攪乱層である。細分すると5層に分けられるが、いずれも黒褐色のシルト質砂層である。層の厚さは30~70cmであり、層中には礫や炭化物・ビニール等が混入している。場所によっては、地山を掘込んでいるところもある。



第2図 調査区位置図

(第Ⅱ層)

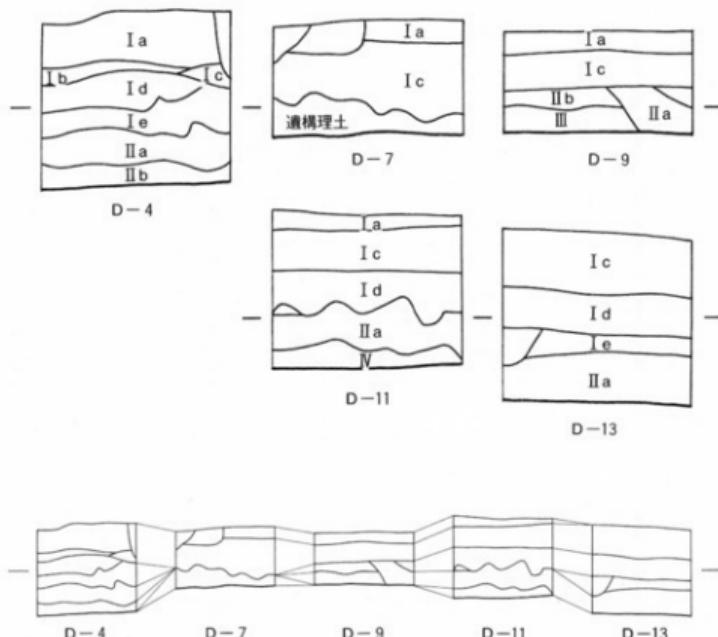
第Ⅱ層は黒褐色・暗褐色砂層である。層の厚さは10cm前後で、耕作による擾乱で層は途切れている。粘性がややあり、しまりがある。層の残りが良くないので、遺物は検出されなかった。

(第Ⅲ層)

第Ⅲ層は黒褐色・暗褐色シルト質砂層で、にぶい黄褐色砂（地山）を含んでいる。層の厚さは10~40cm位である。粘性はややあり、しまりもややある。地山面の標高が高いところは耕作等の擾乱で存在しないところがあるが、ほぼ全域にこの層があったと思われる。ほとんどの遺構はこの層から掘込まれているのだが、この層の上面まで擾乱されているところがほとんどであるため、遺構時期の判断はできない。

(第Ⅳ層)

第Ⅳ層は灰黄褐色砂層で、酸化鉄、炭化物を含んでいる。層の厚さは約10~18cmである。粘性・しまりはあまり認められない。この層は西区・東区の両方に見られるが、ともに層としての広がりは大きくない。擾乱によって層が途切れたと思われるが、層の広がりが大きくなく、炭化物を含んでいるので、遺構の埋土の可能性もあると考えられる。



第3図 基本土層柱状図

4 5 6 7 8 9

10 11 12 13

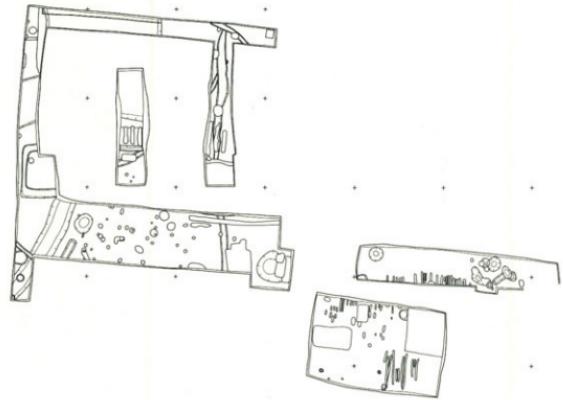
A

B

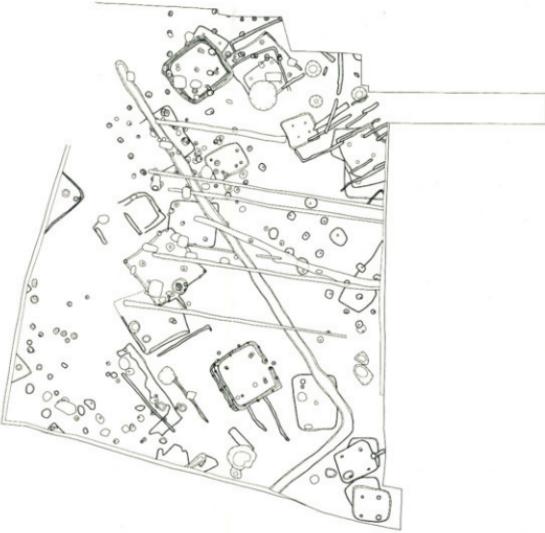
C

D

E



西調査区 (1/400)



東調査区 (1/400)

第4図 遺構配図

2. 発見された遺構と出土遺物

今回の調査では、東調査区と西調査区とに調査区を分けて調査を行った。東調査区では、堅穴住居跡が29軒、掘立柱建物跡が7棟、溝跡、土壙、井戸跡、ピットが検出された。堅穴住居は、古墳時代のものが6軒、奈良～平安時代のものが7軒、その他は時期不明である。掘立柱建物跡は、1間×3間のものが2棟、1間×5間以上のものが1棟、2間×2間のものが3棟で、このうち2棟が総柱である。溝跡については、調査区中央に「く」の字状の大きな溝が1条あり、その他に小溝が多数検出された。小溝のうち畝状を呈しているものもある。井戸跡と思われるものは3基確認されており、うち2基で木枠が検出された。遺物は、土師器が塩釜式の複合口縁壺・甕や壺・器台等のほか、国分寺下層式・表杉ノ入式が出土している。須恵器は、溝や住居から壺・甕・壺・蓋等が出土している。その他に土錘や土製品が出土している。

西調査区からは、溝跡や土壙・ピットが検出されたが、住居跡や掘立柱建物等は検出されなかった。土壙のうち大きくて底が不明のものは井戸の可能性もあると思われる。出土遺物は、主に奈良～平安時代の土師器・須恵器である。

第1号住居跡

〔位置〕 東調査区南東隅のH・I-12に位置している。

〔重複〕 第5号住居跡を切っている。

〔平面形・規模〕 北西隅がやや崩壊して張り出しているが、ほぼ隅丸方形を呈している。規模は南北が3.25m、東西3.71mである。

〔堆積土〕 自然堆積で、4層から成る。堆積土中には多量の炭化物（炭化材）が混入している

〔壁〕 壁は床面からやや外側に傾斜しながら立ち上がっている。最大残存高は東壁で約20cmである。

〔床面〕 地山面を掘込んで床面としている。床面はほぼ平坦である。床面からは炭化物・炭化材が多量に検出されていることから、火災住居と考えられる。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 径22～50cm、深さ2～10cmで円形のピット4つが検出され、これらが主柱である。

〔出土遺物〕 土師器壺、台付甕が出土している。（塩釜式）

第5号住居跡

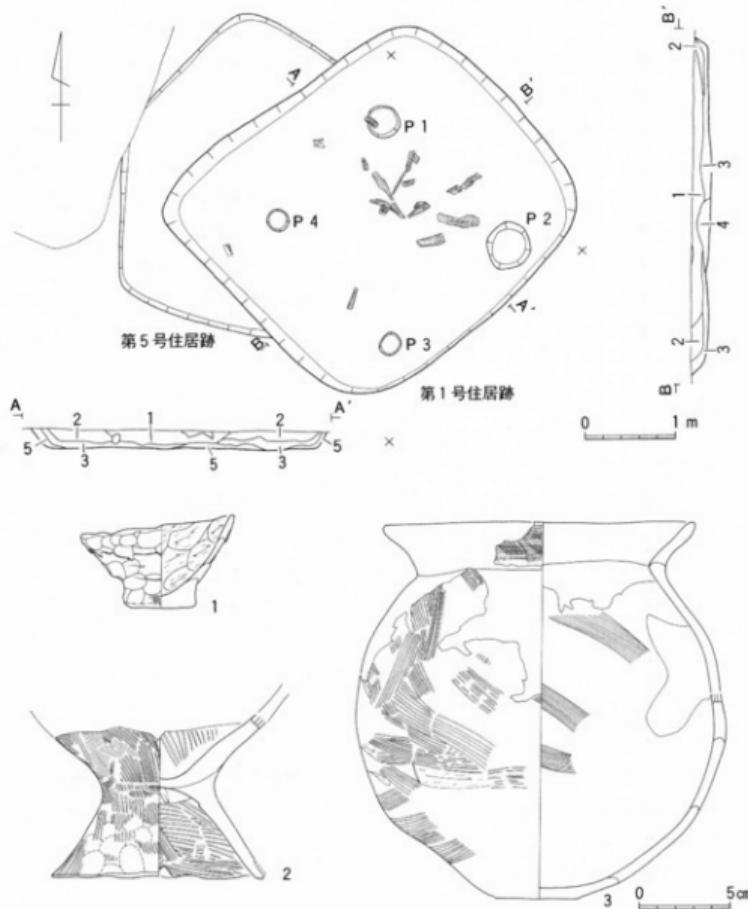
〔位置〕 東調査区南東隅でH・I-12に位置している。

〔重複〕 第1号住居跡及び第2号住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕 東側が第1号住居跡に切られている為、全体の形が分からぬが、ほぼ方形を呈していると思われる。規模は南北約3.36m、東西の残存長は約2.03mである。

〔堆積土〕 削平により堆積土の残りは悪く、1層だけ確認された。地山の土を含む自然堆積土である。

土質番号	土色	土性	粘性	しまり	備考
1番 2.5Y 3/1	黒褐色	砂	弱	弱	赤青紫褐色粒比較的多く混入
2番 2.5Y 2/1	黒	砂	弱	弱	赤青紫褐色粒比較的多く混入
3番 5 Y 4/2	灰オリーブ	砂	弱	弱	赤青紫褐色小ブロック(1.5—2cm)を若干混入
4番 10Y R 1.7/1	黒	シルト質砂	ややあり	弱	炭化物、炭化物を含む
5番 5 Y 4/4	緑オリーブ	砂	弱	弱	赤青紫褐色ブロックを若干混入



名号	種別	外 観 構 造	内 観 構 造	直 径 mm	口 径 mm	底 径 mm	備 考	写真番號
1	土器器千枚ね	(口) 斜面押付 (底) ハナメ→鉛錆押付	(口) ナデ (底) ナデ (底) ナデ	5.2	4.5	3.6		1
2	土器器台付裏	(底) ハナメ→ハラチテ (裏台) 鉛錆押付 →ハナメ	(底) ハナメ (底) ハナメ	(9.1)		11.2	底面→脚台部のみ鉛錆	2
3	土 器 茶葉	(口) ハナメ→ヨコテテ (底) ハラカズリ →ハナメ	(底) ハナメ	29.7	17.2	6.5	1/3欠損	3

第5図 第1号・第5号住居跡・出土遺物

〔壁〕床面からやや外側に傾斜しながら立ち上がる。残存高は北側で約15cmである。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕土師器壺（複合口縁）等が出土している。（塙釜式）

第2号住居跡

〔位置〕東調査区南東部で、第1号・5号住居跡の北I-11・12に位置している。

〔重複〕第4号住居跡・第5号住居跡・第3号土壤を切っている。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形を呈している。規模は南北約3.54m、東西約3.16mである。

〔堆積土〕自然堆積で、8層から成る。いずれもシルト質砂である。

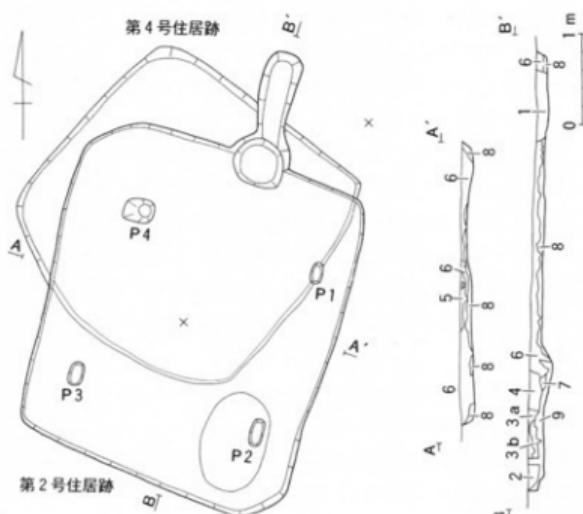
〔壁〕床面よりほぼ垂直に立ち上がる。残存高は北側で約23cmである。

〔カマド・炉〕北

壁中央やや東側に設置されており、燃焼部と煙道を確認した。

〔柱穴〕床面から4つのピットが検出され、これらが主柱穴と考えられる。北西の柱痕は径14cmの円形であるが、ほかの3つの柱痕は長軸が24-30cm、短軸が約15cmの橢円形を呈している。ピットの深さは4-8cmである。

〔出土遺物〕土師器の小破片が僅かに出土している。



層番号	土	色	土性	粘性	しまり	備考
1層	10YR 2/3	黒褐色	シルト質砂	なし	弱	炭化物をごくわずか含む
2層	10YR 2/2	黒褐色	シルト質砂	なし	弱	けむり出し穴
3・4層	10YR 3/4	褐色	シルト質砂	なし	弱	
5・6層	10YR 4/4	褐色	シルト質砂	なし	弱	
7層	7.5YR 3/4	褐色	シルト質砂	弱	弱	土師片燒石を含む
8層	10YR 2/1	黒	シルト質砂	なし	弱	炭化物を少含む
6層	10YR 2/3	黒褐色	シルト質砂	なし	弱	黄褐色砂と灰化物少含む
7層	10YR 3/3	褐色	砂	なし	弱	
8層	10YR 5/6	黄褐色	砂	なし	弱	黒山
9層	2.5YR 5/6	黄褐色	砂	なし	弱	

第6図 第2号・第4号住居跡

第4号住居跡

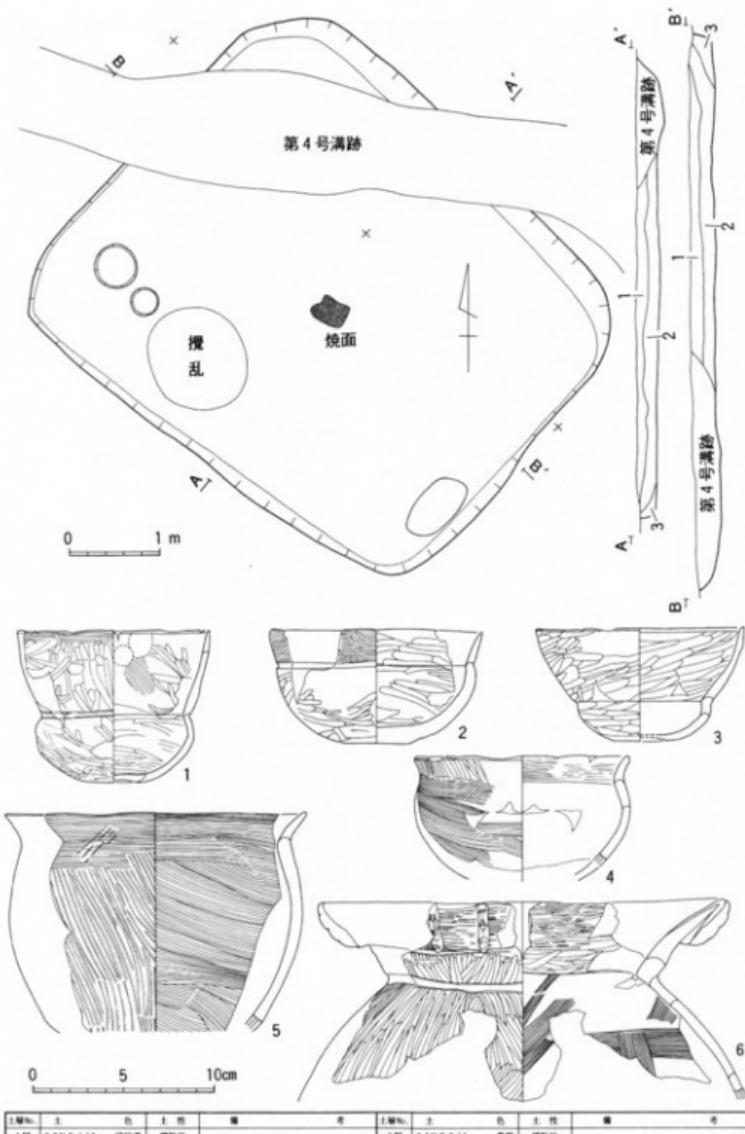
- 〔位置〕 東調査区南東部で第1号・第5号住居跡の北側I-12に位置している。
- 〔重複〕 第2号住居跡に切られている。
- 〔平面形・規模〕 平面形は南側が外に膨らんでいるが、隅丸方形を呈していたと考えられる。規模は南北約3.16m、東西約3.14mである。
- 〔堆積土〕 堆積土は1層のみ確認された。地山の土をブロック状に含む自然堆積土と考えられる。
- 〔壁〕 壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存高は北壁で約16cm、東壁で約4cmである。
- 〔カマド・炉〕 確認されなかった。
- 〔柱穴〕 確認されなかった。
- 〔出土遺物〕 土師器の小破片が僅かに出土している。

第3号住居跡

- 〔位置〕 東調査区南東部の第2号・第4号住居跡の西H-I-11に位置している。
- 〔重複〕 第4号溝に切られている。
- 〔平面形・規模〕 平面形は西側にやや広がるが、隅丸長方形を呈している。規模は南北約4.68m、東西約5.5mである。
- 〔堆積土〕 自然堆積土であり、3層から成る。堆積土は砂質で、炭化物を若干含んでいる。
- 〔壁〕 地山を壁としており、床面よりやや外側に傾きながら垂直に立ち上がっている。
- 〔床面〕 地山を掘込んで床面としている。床面はほぼ平坦である。
- 〔カマド・炉〕 床面はほぼ中央で焼面が確認され、地床炉跡と考えられる。
- 〔柱穴〕 床面からピットが2つ確認されたが、住居に伴うものとは断定できない。
- 〔出土遺物〕 土師器壺が4点、土師器壺が1点出土している。

第6号住居跡

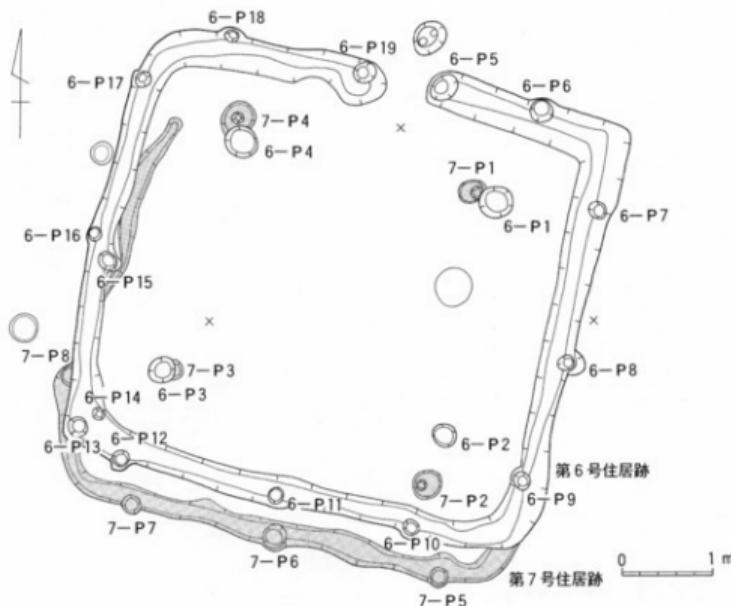
- 〔位置〕 第3号住居跡の西側H-10に位置している。
- 〔重複〕 第7号住居跡を切っている。
- 〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北約5.0m、東西約5.5mである。
- 〔堆積土〕 住居の残りが悪く、周溝にのみ堆積土が見られる。
- 〔壁〕 削平により、残存していない。
- 〔床面〕 地山を床としている。
- 〔カマド・炉〕 カマドは確認されなかったが、周溝が北側で一部途切れ、その外側でピットが確認されていることから、ここにカマドがあったと考えられる。
- 〔柱穴〕 床面から径約30~36cm、深さ約23~27cmではほぼ円形のピットが4個検出された。また、周溝内から径約14~26cm、深さ約12~20cmのほぼ円形のピットが15個検出された。床面の4個のピットは住居の対角線上にあるので主柱穴と考えられる。
- 〔出土遺物〕 土師器、須恵器の小破片が僅かに確認された。



第7図 第3号住居跡・出土遺物

番号	種別	外 周 面 積	内 周 面 積	最高cm	口徑cm	底径cm	層	考	写真回数
1	土器器形	(1) ミコナダ→ミガキ [体] ミガキ (底) テヅリ→ミガキ	(1) 飲食器皿 [体] ヘラナダ→ミガキ (底) ミガキ	8.4	10.6	3.0	1/3欠損		4
2	土器器形	(1) ミコナダ→飲食器皿 [体] ミガキ (底) テヅリ	(1) ミガキ [体] ミガキ [底] ミガキ	6.3	11.7	3.6	1/4欠損		5
3	土器器形	(1) ミガキ [体] ミガキ [底] ミガキ	(1) ミガキ [体] ミガキ [底] ミガキ	5.2	11.5	2.9	1/3欠損		7
4	土器器形	(1) ミガキ [底] ヘナダ	(1) ミコナダ [体] 飲食	6.9	11.8	—	2/3欠損 (底部欠損)		6
5	土器器形	(1) ハケメ→ヨコナダ [底] ハケメ	(1) ヨコナダ [底] ヘナダ	(12.1)	(16.6)	—	4/5欠損 (底部欠損)		8
6	土器器形	(1) ハケメ→隕汎文+縁目 [体] ミガキ	(1) ミガキ [体] ヘナダ	(11.1)	22.6	—	体部中央部欠損		9

第7図 第3号住居跡・出土遺物



第8図 第6号・第7号住居跡

第7号住居跡

〔位置〕 第3号住居跡の西側H-10に位置している。

〔重複〕 第6号住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕 北壁・東壁が第6号住居に切られているが、残存部から平面形は方形を呈していると考えられる。規模は、南北が欠損して不明確であるが約4.26m、東西約5.18mである。

〔堆積土〕 周溝に砂層が見られるのみである。

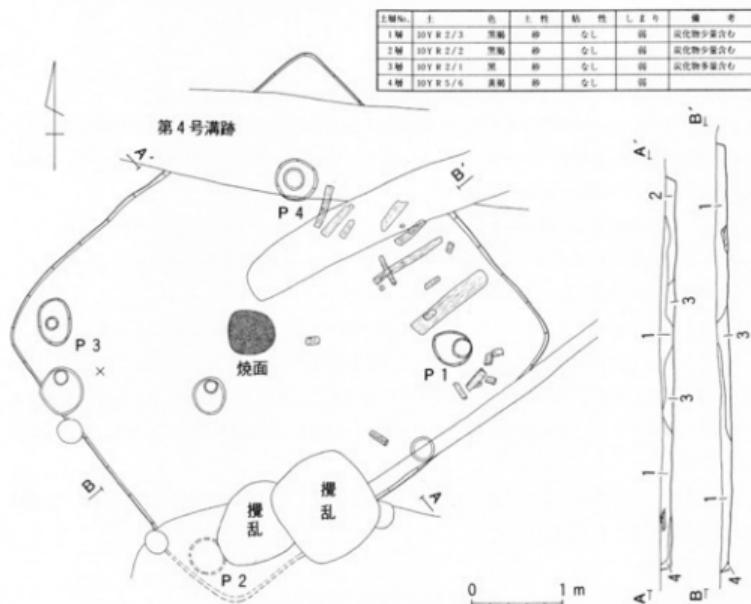
〔壁〕 確認されなかった。

〔床面〕 床面は第6号住居に切られて不明である。

〔カマド・炉〕 第6号住居に切られて不明である。

〔柱穴〕 床面から径約26~40cm、深さ約22cmの円形を呈している4個のピットと壁際で径約20~24cm、深さ約12cmで円形を呈している4個のピットが確認された。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器の小破片が僅かに確認されたのみである。



第9図 第8号住居跡

第8号住居跡

〔位置〕 東調査区中央のG-10付近に位置している。

〔重複〕 第10号住居跡と第4号溝に切られている。

〔平面形・規模〕 南側コーナーおよび南東壁等が住居や擾乱で壊されているが、平面形は隅丸方形を呈している。規模は、長軸約4.82m、短軸約4.38mである。

〔堆積土〕 自然堆積で、4層から成る。土質は砂で、1~3層中に炭化物および炭化材を含んでいる。

〔壁〕 砂質の地山の為やや外側に傾いている所もあるが、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁残存高は7~17cmである。

〔床面〕 地山を床面としている。北東壁際の床面上には炭化材が見られる。



第10図 第8号住居跡出土遺物

番号	種 別	外 壁 溝 管	内 壁 溝 管	断面cm	口径cm	底径cm	備 考	写真回数
1	土器底部	(1) 1ガネ→ココナゲ (2) ヘラケズ→1ガネ 1ガネ (3) ヘラケズリ→1ガネ	(1) ナゲ (2) 1ガネ (3) ヘラケズ ナゲ	13.4	14.7	11.4	1/5欠損	10

〔カマド・炉〕 床面中央よりやや南西に焼土の分布が確認されている。地床炉と考えられる。

〔柱穴〕 床面から径約42~44cmの円形ないし稍円形の4個のピットが確認されている。柱根跡は径約14~22cm、深さ約22~30cmの円形を呈している。

〔出土遺物〕 土師器の高坏が出土している。

第9号住居跡

〔位置〕 東調査区中央やや北側F-10に位置している。

〔重複〕 第5号掘立柱建物跡と切り合い関係にあると思われるが、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕 南東コーナーが欠損しているが、平面形は隅丸長方形を呈している。規模は長軸約3.80m、短軸約3.02mである。

〔堆積土〕 自然堆積で3層からなり、地山の土と炭化物を若干含んでいる黒色砂である。

〔壁〕 地山を壁にしており、一部外側に傾斜しているが、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕 地山を床面とし、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕 床面中央よりやや北西で、焼面が検出されており地床炉と考えられる。

〔柱穴〕 床面から径約27~30cmの円形ないし稍円形のピットが4個検出され、柱痕跡は径約10cm前後で円形を呈しており、深さは約8~11cmである。これら4個のピットの位置が住居の対角線上からややずれて台形を呈しているが理土、規模などがほぼ一致するので、この住居の主柱穴と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器坏、高坏、甕、台付甕、甑等が出土している。遺物は北東コーナーと地床炉の脇南側に集中している。

第10号住居跡

〔位置〕 東調査区中央G-9で第8号住居の南側に位置している。

〔重複〕 第8号住居および第11号住居を切っている。

〔平面形・規模〕 北西コーナーが攪乱等でやや乱れているが、平面形はほぼ正方形を呈している。規模は、東西および南北共に約5.70mである。

〔堆積土〕 自然堆積で、5層から成る。床面上の堆積土の残りは悪く、カマドとカマドのある東側壁際で観察されたのみである。

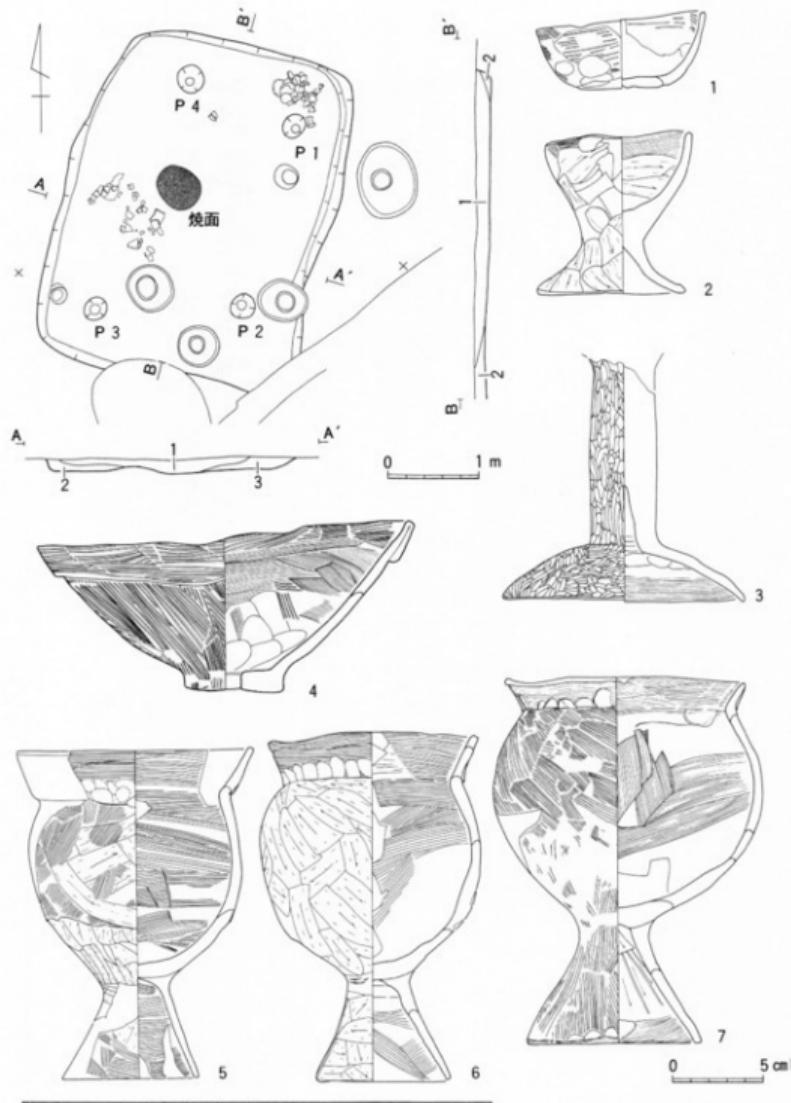
〔壁〕 東側壁以外の壁の残りは1~3cmと悪く、東壁は約15cmである。壁はやや外傾してから垂直に立ち上がる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦であり、壁際で周溝は検出されなかった。

〔カマド・炉〕 東壁の中央よりやや南側で確認された。カマド周辺の壁は外側に張り出し、煙道が延びている。また、袖脇の床面および壁際にそれぞれ1対のピットが見られる。

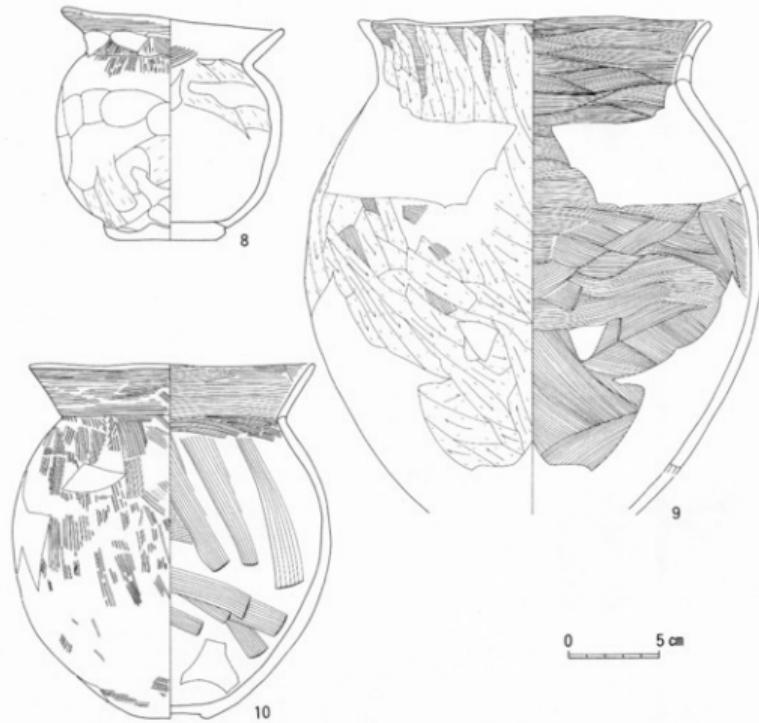
〔柱穴〕 床面上で5個のピットが検出され、壁際で10個のピットが検出された。床面上のうち住居の対角線上にある3個のピットが主柱と考えられる。柱穴は一辺が46~75cmの方形ないし稍円形を呈しており、柱根跡は径約20cmの円形で、深さは23~36cmである。

〔出土遺物〕 土師器甕、須恵器坏、甕の小破片が僅かに検出された。



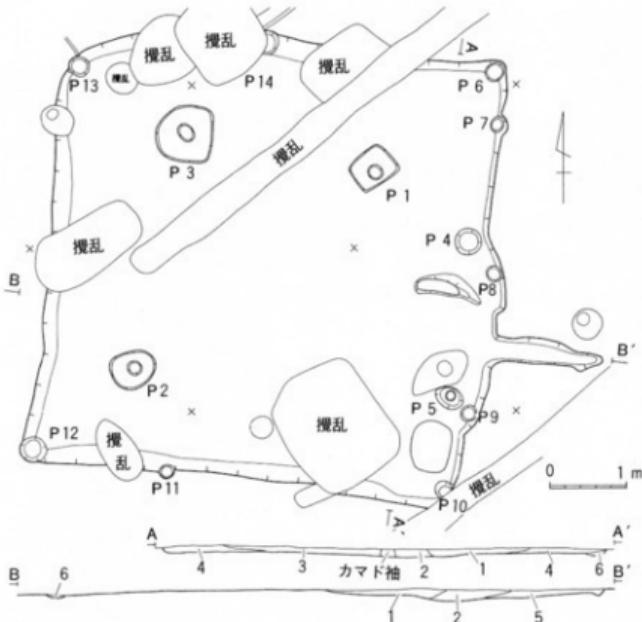
第11図 第9号住居跡・出土遺物

土層	色	土性	備	基
1層	10YR 2/2	褐	地山の土を全体に若干含む。灰を微量含む	
2層	10YR 2/3	褐褐	地山の土を全体に大部にブロック状に含む。灰を若干含む	
3層	10YR 2/1	褐	地山の土を全体に若干含む	



番号	種別	外 壁 調査		内 壁 調査		基高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	圖	写真回数
		調査	状況	調査	状況					
1	土 壤 鉢 片	[(1)] ハケメ→ヘラナデ [図] ハケメ→ヘラナデ→指廻押圧		[(2)] ハナデ		4.5	9.3	4.1	1/5次図	11
2	土 壤 鉢 手捏ね	[(1)] ハケメ→ナダ→ヘラナデ [図] ハケメ→ナダ→ヘラナデ→ヘラナデ [図] ハラナデ		[(2)] ヨコナデ [図] ヘラナデリ		9.0	8.1	8.2		13
3	土 壤 鉢 斧形	[図] ハナデ		[(2)] ナナデ→ヨコナデ		13.3			1/2次図 (両部欠損)	14
4	土 壽 鉢 亂	[(1)] ハケメ [図] ハナデ [図] ハケメ		[(2)] ハケメ→ヨコナデ [図] ナナデ→ハケメ→ナナデ		9.4	20.8	5.5		12
5	土 壤 鉢 台付裏	[(1)] ヨコナデ→指廻押圧 [図] ヘラナデ→ナダ→ナナデ→ヘラナデ [図] ヘラナデ		[(2)] ヨコナデ [図] ヘラナデ [図] ヘラナデ		18.2	13.1	7.5	1/2次図	17
6	土 壤 鉢 台付裏	[(1)] ヨコナデ→指廻押圧 [図] ヘラナデ [図] ヘラナデ		[(2)] ヨコナデ [図] ヘラナデ [図] ヘラナデ		18.3	11.5	7.4		16
7	土 壽 鉢 台付裏	[(1)] ヨコナデ→指廻押圧 [図] ハケメ [図] ハケメ→指廻押圧→ヨコナデ		[(2)] ヨコナデ [図] ヘラナデリ→指廻押圧 [図] ヘラナデリ→ヨコナデ→指廻押圧		30.2	13.2	9.6	1/5次図	18
8	土 壽 鉢 亂	[(1)] ハケメ→ヨコナデ [図] ハラナデ [図] ヨコナデ→ナダ→ナダ [図] ハラナデ		[(2)] ハナデ [図] ヘラナデ		12.7	12.3	5.6	1/4次図	15
9	土 壽 鉢 亂	[(1)] ヨコナデ [図] ハケメ→ヘラナデ→1ガキ [図] ハナデ		[(2)] ヨコナデ [図] ヘラナデ		19.5	15.8	—	1/3次図	22
10	土 壽 鉢 亂	[(1)] ヨコナデ [図] ハケメ→ヘラナデ→1ガキ [図] ナダ		[(2)] ヨコナデ [図] ハケメ→ヘラナデ		19.5	10.8	4.2	1/4次図	21

第12図 第9号住居跡出土遺物



土壌名	土 色	土 性	層	年
1層 10YR 3/1	黒褐色	砂	表を微偏白含む	[カマド内堆積土]
2層 10YR 3/2	黒褐色	砂	灰・塊土を軽に全体に若干含む。地山の土を若干含む	[カマド内堆積土]
3層 10YR 3/2	黒褐色	砂	地山の土若干含む	[住居内堆積土]
4層 10YR 4/2	灰褐色	砂	地山の土を全層に大層にブロック状に含む	[住居内堆積土]
5層 10YR 4/4	黒	砂	地山の土を全層に大層にブロック状に含む	[堆積内堆積土]
6層 10YR 4/3	にほい黄褐色	砂		[周囲内堆積土]

第13図 第10号住居跡

第11号住居跡

〔位置〕 東調査区中央H-9で第10号住居跡の南側に位置している。

〔重複〕 第10号住居に切られている。

〔平面形・規模〕 南壁の西1/4と西壁および北壁の西1/2が削平や住居の切り合いで不明であるが、隅丸長方形を呈していると考えられる。規模は南北約5.36m、東西残存長約4.34mで推定約6.04mである。

〔堆積土〕 自然堆積で、4層から成る。堆積土は、砂で黒褐色土を含んでいる。

〔壁〕 地山を壁としており、東壁と北壁1/2、南壁1/4が残存している。壁はやや外側に傾きながら立ち上がりっている。

〔床面〕 地山を床面としている。西側がはっきりしていないが、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 北東部にピットが切り合って2個検出している。新しいほうが、住居の主柱と考えら

れる。柱穴は短軸約32cm、長軸約42cmの楕円形を呈し、深さは約29cmである。

〔出土遺物〕 土師器甕・壺が出土している。

第12号住居跡

〔位置〕 東調査区南H・I-9に位置し、地山面で確認されている。

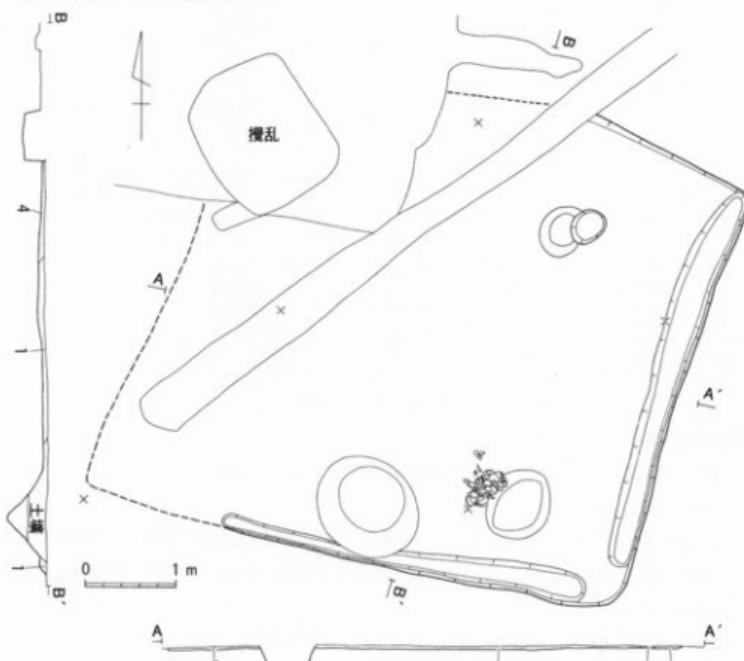
〔重複〕 第15号土塙に切られている。

〔平面形・規模〕 削平により北側の一部しか残っていないが、平面形は方形を呈していると考えられる。規模は東西約8.96m、南北は残りが悪く残存長は約3.44mである。

〔堆積土〕 住居の堆積土の残りは悪く、北側に3層確認された。

〔壁〕 北側と北東および北西コーナー付近が僅かに残存している。壁は1~9cm残存し、やや外傾しながら立ち上がっている。

〔床面〕 削平により不明瞭である。



土解説	土色	土性	粘性	しまり	著者
1号	10YR 4/3	にじい黄褐色	砂	なし	なし
2号	7.5Y R 5/6	明褐色	砂	なし	なし
3号	7.5Y R 5/2	灰褐色	砂	なし	なし
4号	10Y R 4/4	黄	砂	なし	なし

第14図 第11号住居跡

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕住居の範囲がはっきりしないので、断定できないが住居の対角線上にのると思われるビットが4個あり、一辺が46-100cmと幅があるが、柱根跡の径約18cmでビットの間隔もほぼ等しいので、これらが主柱と考えられる。また、この他に壁際に小ビットが見られる。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第13号住居跡

〔位置〕東調査区北西部F-9に位置し、地山面で確認された。

〔重複〕第4号掘立柱建物および第4号溝に切られている。

〔平面形・規模〕南側が削平により不明であるが、残存部分からほぼ方形を呈していると考えられる。規模は東西約5.24m、南北残存長約3.90mである。

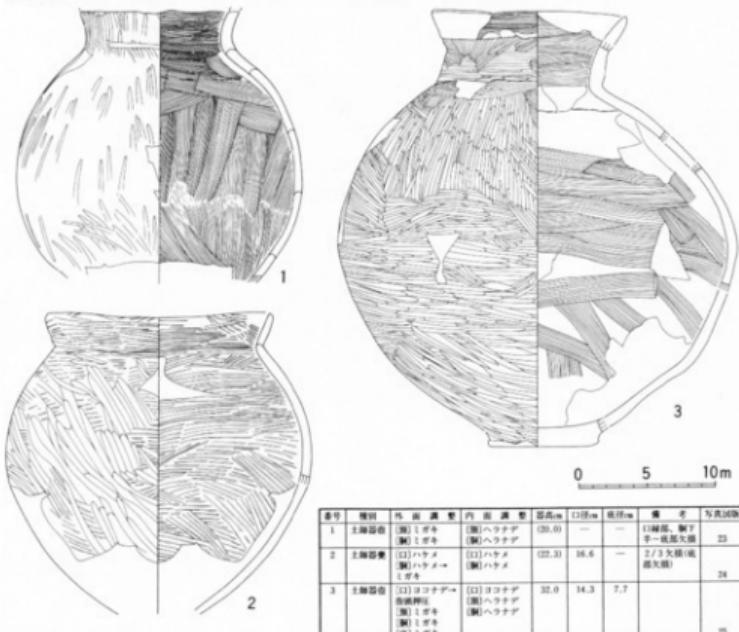
〔堆積土〕削平により残りが悪く、2層確認されたのみである。いずれも黒褐色砂である。

〔壁〕壁残存最大高は北壁で、約6cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕南側が不明瞭であるが、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕住居の対角線上に思われるところに短軸約32cm、長軸約36cmの橢円形を呈したビット

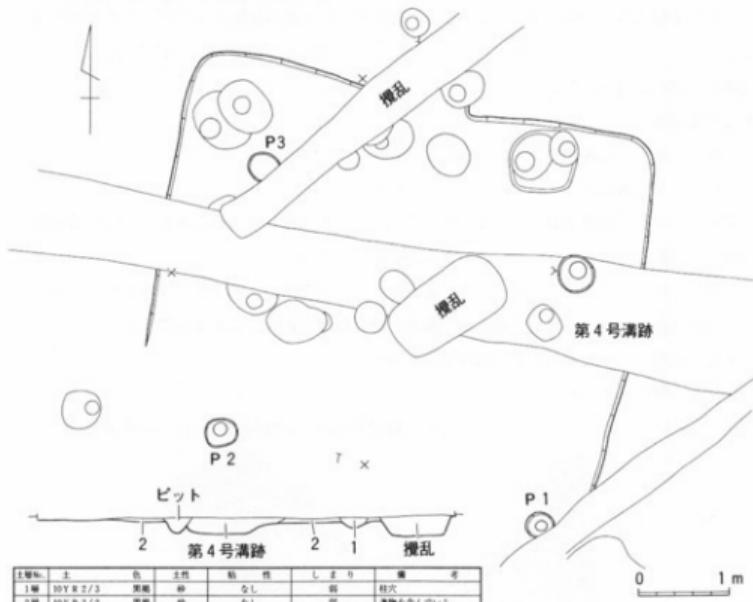


番号	種別	性	固	溝	内	面	溝	整	面高cm	口径cm	底径cm	備考	写真回数
1	土器器物	(1)	ガキ	(1)	ヘラナデ	(1)	ヘラナデ	(1)	(20.0)	—	—	口縁部、斜面 手-底部(大盤)	23
2	土器器物	(1)	ハケメ	(1)	ハケメ	(1)	ハケメ	(1)	(22.3)	16.6	—	2/3欠損(底 部欠損)	24
3	土器器物	(1)	ココナツ	(1)	ココナツ	(1)	ココナツ	(1)	(31.0)	14.3	7.7	—	25

第15図 第11号住居跡出土遺物

が3個あり、これらが主柱と考えられる。残りの1個は検出されなかった。

〔出土遺物〕土師器の小破片が僅かに確認されたのみである。



第16図 第13号住居跡

第14号住居跡

〔遺構確認〕東調査区北西部E-10に位置している。

〔重複〕第1号掘立柱建物に切られ、第5号住居および第19号住居・第21号住居を切っている。

〔平面形・規模〕北西および南西コーナーがやや張り出す隅丸方形を呈している。規模は南北約5.74m、東西約5.70mである。

〔堆積土〕6層から成る。第3層は明黄褐色粘土のカマド袖である。その他の層は暗褐色砂でしまり・粘性があまりない。

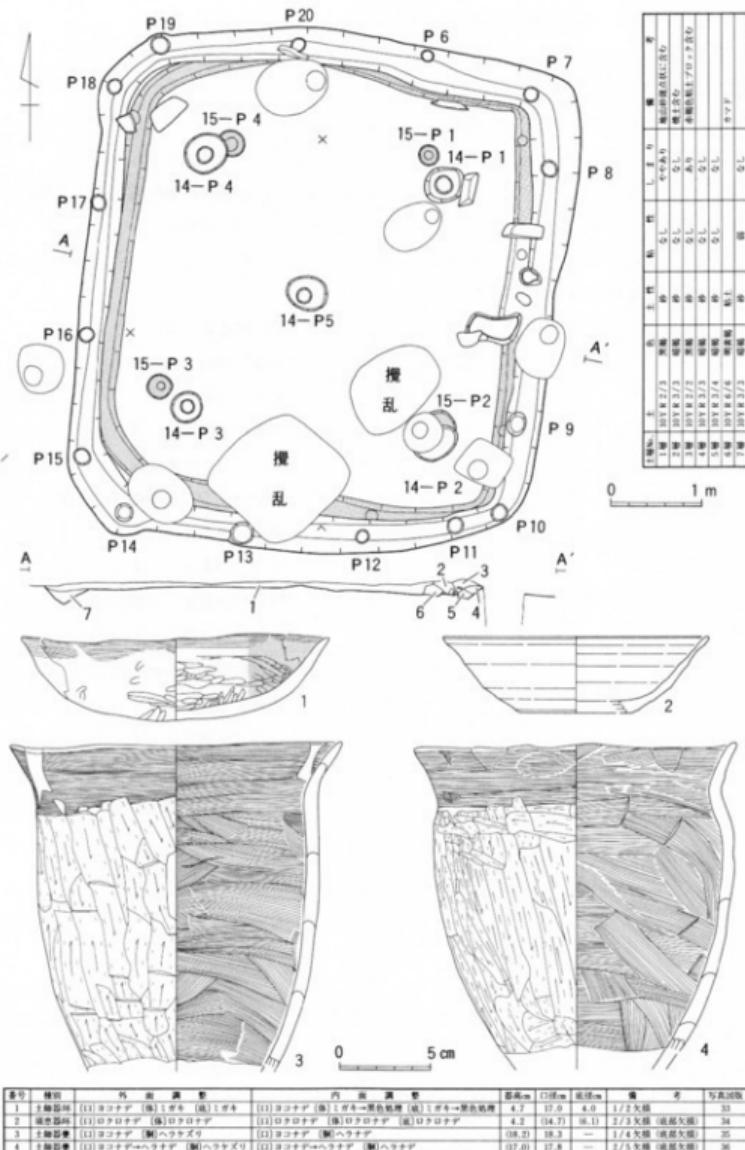
〔壁〕壁は残存していない。

〔床面〕地山を床面としており、しまりがあり、ほぼ平坦である。

〔周溝〕幅約40cm、深さ約20cmあり、断面形は「U」字形を呈している。

〔カマド・炉〕東壁のはば中央にカマドの袖が残存している。煙道は第1号掘立柱建物跡に切られている。

〔柱穴〕床面上で5個、壁際で15個のピットが確認された。床面上のピットは住居の対角線上に位置していることから主柱と考えられる。柱穴は短軸約33~43cm、長軸約36~50cmの楕円形



第17図 第14・15号住居跡・出土遺物

で、柱根跡は径約20cmの円形を呈している。

〔出土遺物〕土師器丸底内黒坏・甕・須恵器坏が出土している。

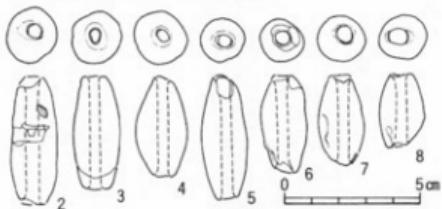
第15号住居跡

〔位置〕東調査区北西部E-10に位置している。

〔重複〕第1号掘立柱建物および第14号住居に切られており、第21号住居を切っている。

〔平面形・規模〕第14号住居に切られ外側は不明瞭であるが、周溝の内側の線からほぼ隅丸方形を呈していると考えられる。規模は南北約4.90m、東西約4.52mである。

〔堆積土〕堆積土は第14号住居に切られているため、ほとんど残っていない。周溝に黒褐色砂の1層が確認されるのみである。



〔壁〕確認されなかった。

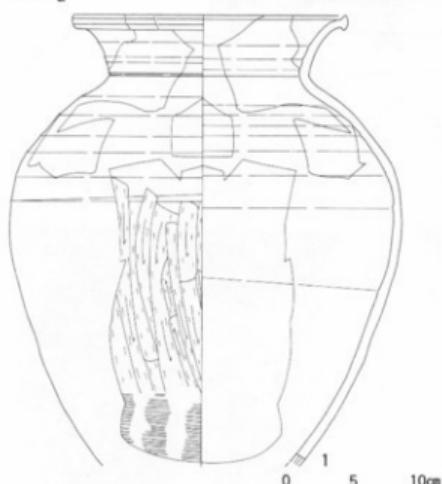
〔床面〕第14号住居により削平されたと考えられる。

〔周溝〕幅約30cm、深さ約11cmで、断面形は「U」字形を呈している。

〔カマド・炉〕東壁中央で周溝が一部不明瞭になるところがあり、この部分にカマドがあったと考えられる。

〔柱穴〕床面より4個の柱穴が確認された。柱穴は径24~30cmで円形を呈し、柱根跡は径10~16cmの円形で、深さ7~10cmである。これらは住居の対角線上にほぼ位置することから主柱と考えられる。

〔出土遺物〕確認されなかった。



番号	種別	外 周 溝 形	内 周 溝 形	基高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	備 考	写真図版
1	出土器物	(口) ロクロナダ (腹上) ロクロナダ (脚下) ハラケズリ、平行テナキ	(口) ロクロナダ (腹) ロクロナダ	(32.0)	(20.0)	—	4/5欠損	27
2	土 砂	(径2.5) 4.6 (内径) 0.5 (外径) 1.4 植痕あり	29	3 土 砂	(底2.5) 4.1 (内径) 0.5 (外径) 1.7	—	—	26
4	土 砂	(径2.5) 3.7 (内径) 0.5 (外径) 1.9	27	5 土 砂	(底2.5) 4.5 (内径) 0.5 (外径) 1.7	—	—	28
6	土 砂	(径2.5) 3.5 (内径) 0.5 (外径) 1.7	30	7 土 砂	(底2.5) 3.3 (内径) 0.6 (外径) 1.7	—	—	29
8	土 砂	(径2.5) 2.7 (内径) 0.6 (外径) 1.6	32					

第18図 第14号住居跡出土遺物

第16号住居跡

〔位置〕 東調査区北東部F-11に位置している。

〔重複〕 溝に切られている。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形を呈している。規模は南北約3.06m、東西約2.88mである。

〔堆積土〕 堆積土の残りは悪く、2層のみ確認された。自然堆積で黒褐色・褐色の砂で黄褐色砂をブロック状に含んでいる。また、土器片も含んでいる。

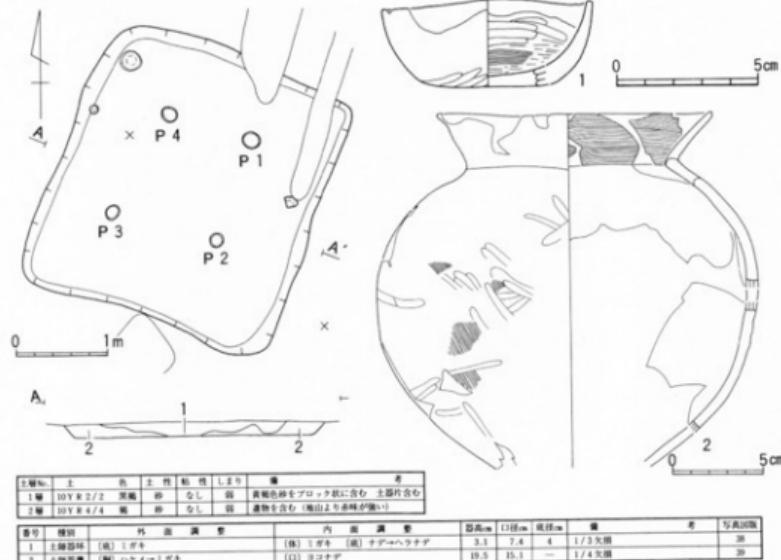
〔壁〕 地山を壁としており、やや外側に傾斜しながら立ち上がっている。壁の残存高は、11~19cmである。

〔床面〕 地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 床面より4個のビットが確認され、これらは住居の対角線上に位置していることから主柱と考えられる。ビットはいずれも円形を呈しており、径16~20cm、深さ約3cmである。

〔出土遺物〕 土器器坏・甕が出土している。遺物は北西部の壁際と東側壁際からといずれも壁際からの出土である。



第19図 第16号住居跡・出土遺物

第17号住居跡

〔位置〕 東調査区北部F-11・12に位置している。

〔重複〕 第18号・第22号・第23号住居を切っており、溝に切られている。

〔平面形・規模〕 南東コーナー付近が溝等に切られており不明であるが、残存部から方形を呈していると考えられる。規模は南北約4.30m、東西約4.04mである。

〔堆積土〕 自然堆積で、5層から成る。土層は褐色・黒褐色砂で粘性がなく酸化鉄を含んでいる。

〔壁〕 地山および住居埋土を壁としており、外側にやや傾斜しながら立ち上がっている。壁の残存高は、3~5cmである。

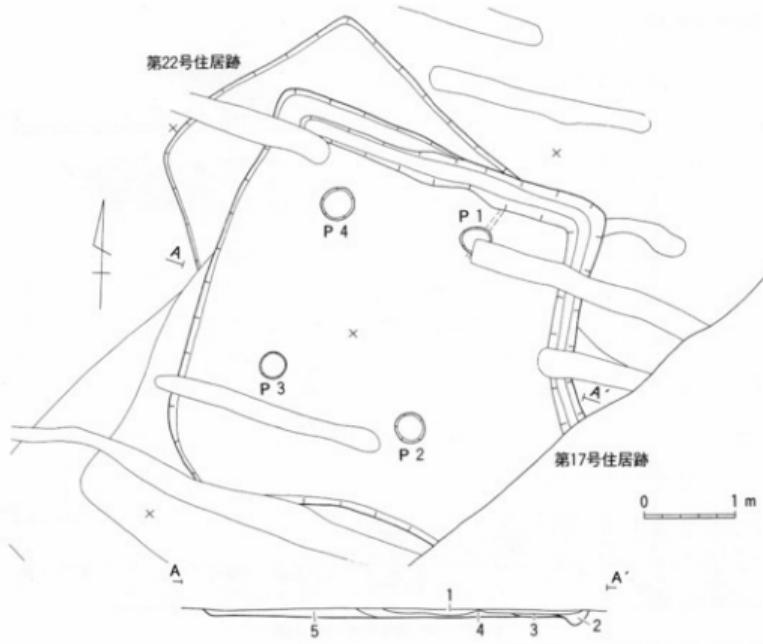
〔床面〕 地山および住居埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。

〔周溝〕 幅約26cm、深さ約8cmである。周溝は北壁および東壁のみで確認された。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 床面から4個のピットが確認され、これらはほぼ住居の対角線上にあることから主柱穴と考えられる。ピットはいずれも円形を呈しており、径30~36cm、深さは約4cmである。

〔出土遺物〕 土師器壺・須恵器壺・壺が出土している。いずれも小破片である。



第20図 第17号・第22号住居跡

土層No.	土 色	土性	粘 性	しまり	種 考	土層No.	土 色	土性	粘 性	しまり	種 考
1層	10Y R 3/1 黒褐色	砂	なし	弱	酸化鉄含む	4層	10Y R 3/1 黒褐色	砂	なし	弱	酸化鉄含む
2層	10Y R 4/3 にぶい青褐色	砂	なし	弱	酸化鉄含む(少量)	5層	10Y R 2/1 黒	砂	なし	弱	酸化鉄含む
3層	10Y R 4/4 黒	砂	なし	弱	酸化鉄含む(少量)						

第22号住居跡

〔位置〕 東調査区北部 F - 11に位置している。

〔重複〕 第18号住居に切られている。

〔平面形・規模〕 住居の南部は他の遺構に切られており不明である。また、西側がやや外側に広がっている。規模は南北約2.90m、東西約2.66mである。

〔堆積土〕 他の遺構により削平されているため、暗褐色砂層が1層確認されたのみである。

〔壁〕 地山を壁としている。残存高は4～8cmであり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕 地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 確認されなかった。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第18号住居跡

〔位置〕 東調査区北東部 F - 11・12に位置している。

〔重複〕 第17号住居に切られており、第22号・第23号住居を切っている。

〔平面形・規模〕 東側が調査区外で未堀のため不明であるが、ほぼ方形を呈していると考えられる。規模は東側の範囲が不明であり、東西の残存長は約4.38m、南北約4.66mである。

〔堆積土〕 自然堆積で、堆積土は暗褐色砂・明褐色砂・黄褐色砂から成る。3・4層では灰白色砂を斑点状に含む。また、4層には炭化物・遺物を含んでいる。

〔壁〕 地山および住居埋土を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は3～14cmである。

〔床面〕 地山および住居埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。床面上には遺物および炭化材が見られる。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 北西および南西コーナー付近からそれぞれビットが1個確認された。柱穴は短軸40～52cm、長軸47～60cmの楕円形を呈し、柱根跡は径17～23cmの円形で深さ約11cmである。

〔出土遺物〕 土師器甕・瓶・土錐・不明土製品が出土している。また、北と東側で壁に沿って、炭化材が平行に並んだ状態で出土している。

第23号住居跡

〔位置〕 東調査区北部 F - 11・12に位置している。

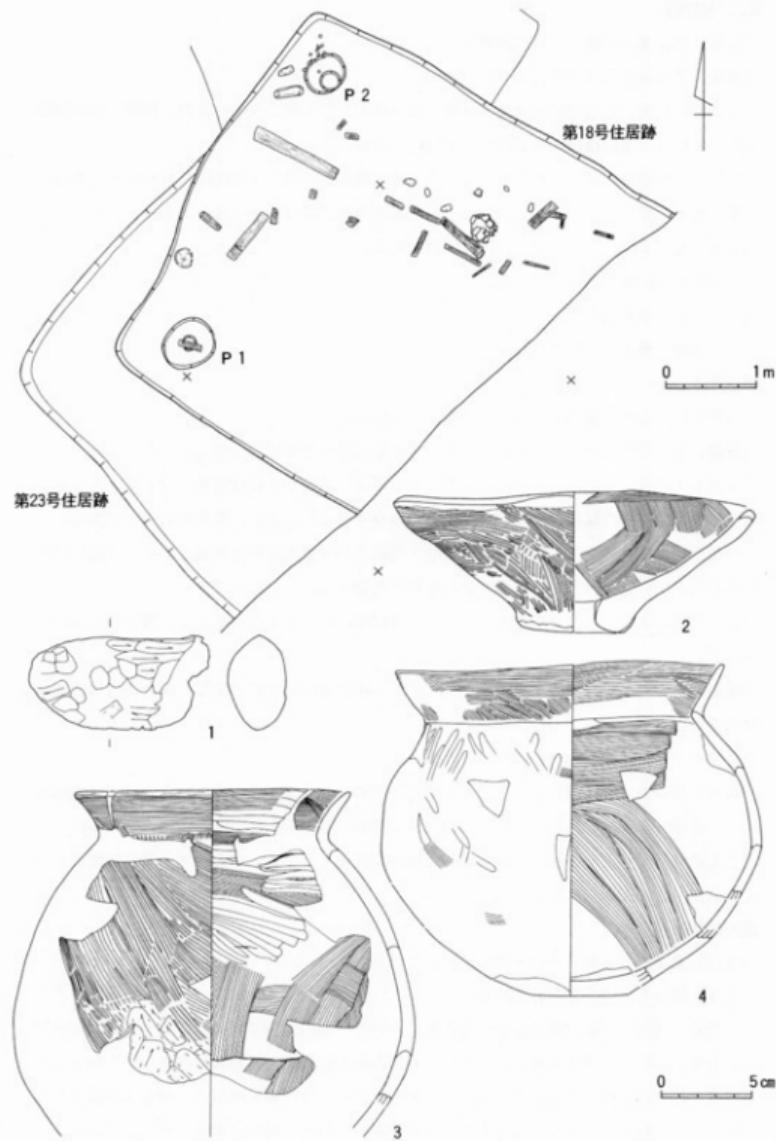
〔重複〕 第18号住居に切られている。

〔平面形・規模〕 住居の北東部から南東部にかけて、他の遺構等に切られているが、平面形は方形を呈していると考えられる。規模は長軸残存長が約3.70m、短軸残存長が約3.24mである。

〔堆積土〕 他の遺構との切り合いや削平により、堆積土は黒褐色砂層の1層のみ確認された。

〔壁〕 地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁残存高は18～26cmである。

〔床面〕 地山を床面としており、ほぼ平坦である。



第21図 第18号・第23号住居跡・出土遺物

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第19号住居跡

〔位置〕東調査区北西部E-11・12に位置している。

〔重複〕第6号・第7号掘立柱建物および第14号住居、第11号土壌に切られてしまい、第20号住居を切っている。

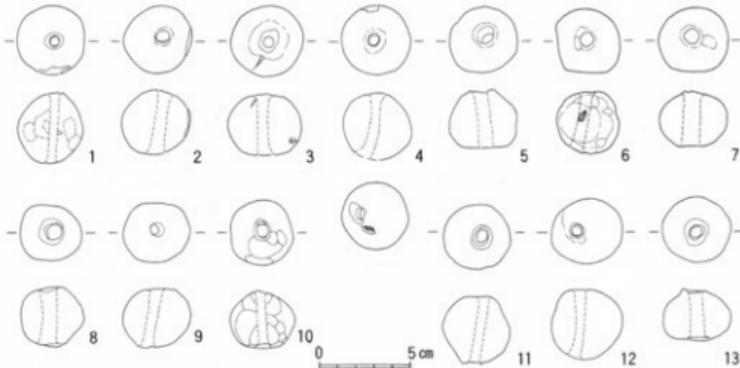
〔平面形・規模〕住居南側が他の遺構に切られているため不明瞭であり、またやや北西部が広がるが方形を呈していたと考えられる。規模は南北約5.44m、東西約5.62mである。

〔堆積土〕堆積土は削平により僅かしか残存していない。堆積土は暗褐色砂が1層確認されたのみである。

〔壁〕壁の残存高は3~11cmであり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕地山および住居埋土を床面としている。

〔周溝〕周溝は東壁側全体と北壁側の一部で確認された。幅は約28cmで、深さが約17cmである。



番号	種別	特 質	写真図版
1	不明土質 出	ハラカズリ→鉛鉱鉄斑(良品)(30.0) (中)3.2	41

番号	種別	外 周 長 度	内 周 長 度	器高cm	口径cm	底径cm	備 考	写真図版
2	土壤留物	(13) ハテメ (横) ハテメ	(13) ヘラナデ (横) ヘラナデ	7.8	20.8	5.6		40
3	土壤留物	(13) ミコナデ (横) ハテメ (横上) ハ テメ (横下) ハラカズリ	(13) ミコナデヘラキ (横上) ヘラナデ ヘラナデ (横下) ヘラナデ	19.2	15.2	—	1/3塊存	56
4	土壤留物	(13) ミコナデヘラナデ (横上) ハテ メ、1ガキ (横下) ハラナデ、1ガキ	(13) ミコナデヘラナデ (横上) ヘラナ デ (横下) ヘラナデ	18.4	18.1	5.2	1/5欠損	55

番号	種別	特 質	写真図版	番号	種別	特 質	写真図版
1	土 織	(良品) 3.9 (内径) 0.5 (外径) 3.8 古墳時代	43	2	土 織	(良品) 3.6 (内径) 0.7 (外径) 3.8	44
3	土 織	(良品) 3.4 (内径) 0.6 (外径) 4.0 残痕あり	45	4	土 織	(良品) 3.7 (内径) 0.5 (外径) 3.8 残痕あり	46
5	土 織	(良品) 3.2 (内径) 0.7 (外径) 3.8	47	6	土 織	(良品) 3.3 (内径) 0.8 (外径) 3.7 古墳時代 残痕あり	42
7	土 織	(良品) 3.1 (内径) 0.9 (外径) 3.9	48	8	土 織	(良品) 3.3 (内径) 0.8 (外径) 3.4	45
9	土 織	(良品) 3.3 (内径) 0.6 (外径) 3.7	50	10	土 織	(良品) 3.2 (内径) 0.5 (外径) 3.6 古墳時代	52
11	土 織	(良品) 3.3 (内径) 0.5 (外径) 3.7	54	12	土 織	(良品) 3.9 (内径) 0.5 (外径) 4.0	53
13	土 織	(良品) 2.9 (内径) 0.7 (外径) 3.8	53				

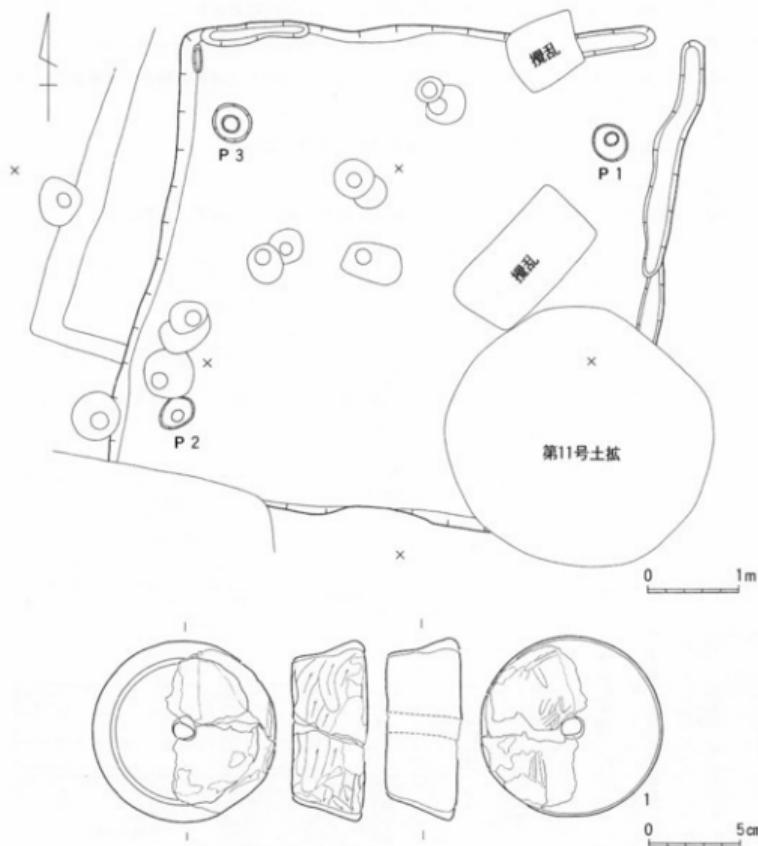
第22図 第18号住居跡出土遺物

断面形は「U」字形を呈している。

[カマド・炉] 確認されなかった。

[柱穴] 床面より3個のピットが検出された。これらのピットは住居の対角線上に位置することから主柱と考えられる。残りの1個は第11号土壙に切られている。柱穴は短軸33~41cm、長軸42~44cmの楕円形で、柱根跡は径14~19cmの円形を呈しており、深さは5~11cmである。

[出土遺物] 土製紡錘車が出土している。その他に土師器・須恵器の小破片が出土している。



番号	種別	物 種	写真回数
1	出土 物	(縄文) ナフ (縄文) 1.ガキ (内田) 1.1 (外田) 10.12	57

第23図 第19号住居跡・出土遺物

第20号住居跡

〔位置〕 東調査区北西部 E-11・12に位置している。

〔重複〕 第6号・第7号掘立柱建物および第19号住居、第11号土壙、溝に切られている。

〔平面形・規模〕 住居南部は他の遺構に切られているため不明であるが、残存部から隅丸方形を呈していると考えられる。住居東側は溝の影響を受けて広がった思われる。

〔堆積土〕 他の遺構に切られているため残りは悪く、暗褐色砂で黄褐色の地山の土を含んでいる1層のみ確認された。

〔壁〕 壁は住居の南部1/2が他の遺構により削平されている。残存している壁高は2~7cmであり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕 地山を床面としている。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 床面より3個のピットが検出され、住居の対角線上に位置することから、これらが主柱と考えられる。柱穴は短軸20~26cm、長軸24~32cmの楕円形を呈しており、深さは3~8cmである。

1個は第11号土壙に切られている。

〔出土遺物〕 検出されなかった。



第24図 第20号住居跡

第21号住居跡

〔位置〕 東調査区北西部 E-10に位置している。

〔重複〕 第1号掘立柱建物および第14号・第15号住居に切られている。

〔平面形・規模〕 平面形は西から東に向かってやや広がっているが、ほぼ隅丸方形を呈している。規模は南北約3.54m、東西約3.10mである。

〔堆積土〕 他の遺構によって削平されており、堆積土の残りは悪い。暗褐色砂が確認されたのみである。

〔壁〕 地山を壁している。壁残存高は4~11cmと残りは悪い。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕 地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 床面より4個のピットが検出されており、住居の対角線上にほぼ位置していることから主柱と考えられる。柱穴は住居の平面形同様東側がやや広がっている。柱穴は径が21~22cmの円形を呈しており、深さは4~7cmである。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第26号住居跡

〔位置〕 東調査区南西部F・G-8に位置している。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 北東コーナー付近を検出しており、他は調査区外のため未調査である。残存部から平面形は方形を呈していると考えられる。規模は長軸残存長約3.20m、短軸残存長約2.18mである。

〔堆積土〕 自然堆積で、黒褐色砂層と褐色砂層から成る。

〔壁〕 地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は5~12cmである。

〔床面〕 地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕 壁に沿って巡っている。幅は約26cmで、深さは約8cmであり、断面形は「U」字形を呈している。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 北東コーナー付近の床面上で2個のピットが検出されているが、住居に伴うものか判定できない。また周溝内からもピットを1個検出している。

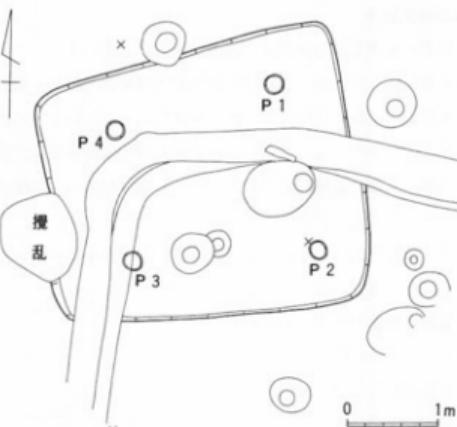
〔出土遺物〕 土器師・須恵器の小破片が僅かに検出されたのみである。

第28号住居跡

〔位置〕 東調査区西部G-9で、第10号住居と第26号住居の間に位置している。

〔重複〕 第29号住居を切っている。

〔平面形・規模〕 西側の一部と東側が削平により不明であるが、南西コーナーが残存しており



第25図 第21号住居跡

ほぼ長方形を呈していると考えられる。規模は長軸は削平により全長が不明であるが残存長は約4.12mであり、短軸は約3.64mである。

〔堆積土〕 黒褐色砂層が1層確認されたのみである。

〔壁〕 地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は約6cmである。

〔床面〕 地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕 北壁および南壁の一部に沿ってあり、幅は約38cmで、深さが約5cmである。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 確認されなかった。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第29号住居跡

〔位置〕 東調査区西部G-9で、第28号住居の北側に位置している。

〔重複〕 第28号住居に切られている。

〔平面形・規模〕 住居南部が第28号住居に切られ全体の形は不明である。また北西コーナーの外側が不整形であるが、平面形は方形を呈していたと考えられる。規模は東西約3.80mで、南北残存長約2.86mである。

〔堆積土〕 暗褐色砂層の1層が確認されたのみである。

〔壁〕 壁の残りは約2cmとあまり良くない。地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がると考えられる。

〔床面〕 地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕 残存部壁沿いにみられる。幅は38~58cmと幅が広く、深さは約6cmである。

〔カマド・炉〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 確認されなかった。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

3. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

〔位置〕 東調査区北西部D-E-9・10に位置している。

〔重複〕 第14・15・21号住居を切っている。

〔規模〕 柱行5間以上、梁行1間の東西棟である。柱行は北側柱列の総長9.72m、南側柱列の総長9.52m、柱間は北側柱列で1.90、2.14、1.96、1.82、1.90m、南側柱列で1.72、2.14、1.96、1.70、2.00mである。梁行は西側柱列の柱間は4.44m、東側柱列の柱間は4.42mである。梁行の柱間が柱行の柱間の2倍以上あるので、西側・東側柱列の中間付近を何度も精査したが柱穴は検出することはできなかった。

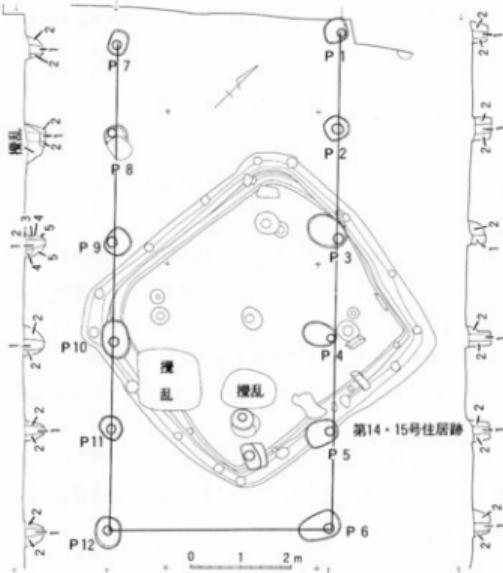
〔柱穴〕 柱穴は楕円形を呈しているものもあるが、隅丸方形ないし長方形を呈していたと考えられる。短軸が38~60cm、長軸が50~80cmである。柱根跡はいずれも円形で、径は14~24cm、

深さが36~51cmである。

〔埋土〕 理土はいずれも黒褐色砂層で黄褐色砂を含んでいるものと黒褐色砂層で遺物や炭化物粒を僅かに含んでいるものの2層からなる。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器の小破片が検出されている。土師器はロクロ使用のものがある。

須恵器は回転系切り底である。



土壇No.	土 色	土 性	性 態	しまり	層 名
P1-1号	10Y R 3/1 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂層及び灰化物粒を含む
2号	10Y R 3/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂を帶状に含む
P8-1号	10Y R 3/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂を帶状に含む
2号	10Y R 3/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂を帶状に含む
P9-1号	10Y R 3/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂を帶状に含む
P10-1号	10Y R 3/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂を帶状に含む
P11-1号	10Y R 3/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂を帶状に含む
P12-1号	10Y R 3/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂を帶状に含む

土壇No.	土 色	土 性	性 態	しまり	層 名
P1-1号	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質砂	弱	弱	黄褐色シルト砂を斑点状に含む、小石を含む
2号	10Y R 2/2 黒褐色	砂	弱	弱	黄褐色砂をわずかに含む
P2-1号	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質砂	弱	弱	灰化物をわずかに含む
2号	10Y R 2/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂を含む
P3-1号	10Y R 2/2 黒褐色	砂	なし	弱	灰化物を斑点状に含む、小石を含む
P3-2号	10Y R 2/2 黒褐色	砂	なし	弱	黄褐色砂をしらふり状に含む、遺物を含む
P4-1号	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質砂	弱	弱	灰化物、小石をわずかに含む、遺物を含む
2号	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質砂	弱	弱	黄褐色砂を斑点状に含む、小石を含む
P5-1号	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質砂	弱	弱	灰化物、小石を含む
2号	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質砂	弱	弱	黄褐色砂を含む
P6-1号	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質砂	弱	弱	黄褐色砂をわずかに含む
2号	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質砂	弱	弱	黄褐色砂をしらふり状に含む

第26図 第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡

〔位置〕 東調査区北部G・H-11・12で第3号掘立柱建物の東側に位置している。

〔重複〕 溝に切られている。

〔規模〕 桁行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間は北側柱列で1.84m、南側柱列で2.34、1.78m、西側柱列で2.14、1.88m、東側柱列で1.94mである。

〔柱穴〕 柱穴は長軸が42~90cm、短軸が38~74cmで、隅丸方形ないし長方形を呈している。柱根跡はいずれも円形で径が12~18cm、深さが11~34cmである。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第3号掘立柱建物跡

〔位置〕 東調査区北部G-11で第2号掘立柱建物の西側に位置している。

〔重複〕 溝に切られている。

〔規模〕 桁行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間は北側柱列で2.22、1.90m、南側柱列で2.34、2.30m、西側柱列で2.26、2.40m、東側柱列で2.42、2.44mである。

〔柱穴〕 柱穴は一辺が60~94cmの方形を呈しているものと長軸が110~174cm、短軸が86~146cmの長方形を呈しているものがある。柱根跡は円形で、径が14~20cm、深さが22~45cmである。

〔埋土〕 埋土は2層~4層からなり、ほとんどが黒褐色砂層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器の小破片が出土している。土師器では内黒のものがある。

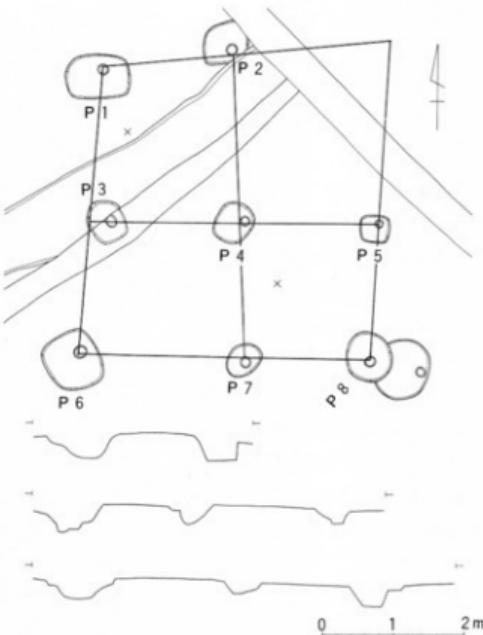
第4号掘立柱建物跡

〔位置〕 東調査区西部E・F-9・10で第1号掘立柱建物の南側に位置している。

〔重複〕 第5号掘立柱建物および第13号住居を切っている。

〔規模〕 桁行4間、梁行2間の東西棟である。桁行は北側柱列で総長8.04m、南側柱列で総長7.70mである。柱間は北側柱列が西から2.10、1.90、1.60、2.44m、南側柱列が西から1.94、1.88、1.82、2.06mである。梁行は西側柱列で総長4.68m、東側柱列で総長5.16mである。柱間は西側柱列が北から2.16、2.52m、東側柱列が北から2.68、2.48mである。

〔柱穴〕 柱穴は梢円形のものもあるがほぼ長方形を呈しており、長軸が44~76cm、短軸が40~58cmである。柱根跡は南東隅以外のものすべてにみられ、いずれも円形を呈している。径は14



第27図 第2号掘立柱建物跡

~22cm、深さが24~42cmである。

〔埋土〕 埋土は3~5層で、暗褐色砂層とにびい黄褐色砂層からなっている。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器の破片が検出している。

第5号掘立柱建物跡

〔位置〕 東調査区中央F-9・10で第4号掘立柱建物の東側に位置している。

〔重複〕 第4号掘立柱建物に切られおり、第9号住居を切っている。

〔規模〕 衍行2間、梁行2間の建物である。北側柱列の総長は4.50mで柱間が2.20、2.30m、南側の柱列の総長は5.08mで柱間は不明である。西側柱列の総長は4.28mで柱間は2.22、2.06m、東側柱列の総長は4.68mで柱間は2.34、2.34mである。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第6号掘立柱建物跡

〔位置〕 東調査区西部E-11・12で第1号掘立柱建物の東側に位置している。

〔重複〕 第7号掘立柱建物および第19号住居を切っている。

〔規模〕 衍行4間、梁行1間の南北棟

である。衍行は北側柱列で総長5.12m、柱間は1.38、1.18、1.20、1.36mである。南側柱列の総長5.16m、柱間は1.40、1.16、1.32、1.28mである。梁行は西側柱列で柱間3.84m、東側柱列で柱間3.84mである。

〔柱穴〕 柱穴は径が26~56cmの円形ないし梢円形を呈している。柱根跡は南側柱列のみで検出されており、いずれも円形を呈している。径は16~18cm、深さが8~21cmである。

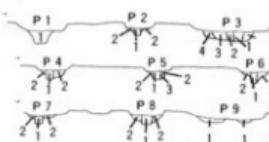
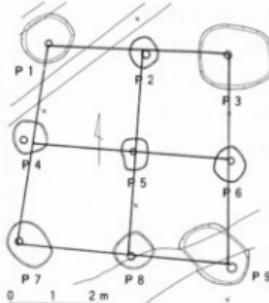
〔埋土〕 埋土は3~5層で、暗褐色・黒褐色砂層と黄褐色粘土層からなる。層中には黄褐色砂あるいは黄褐色粘土を含むものがある。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第7号掘立柱建物跡

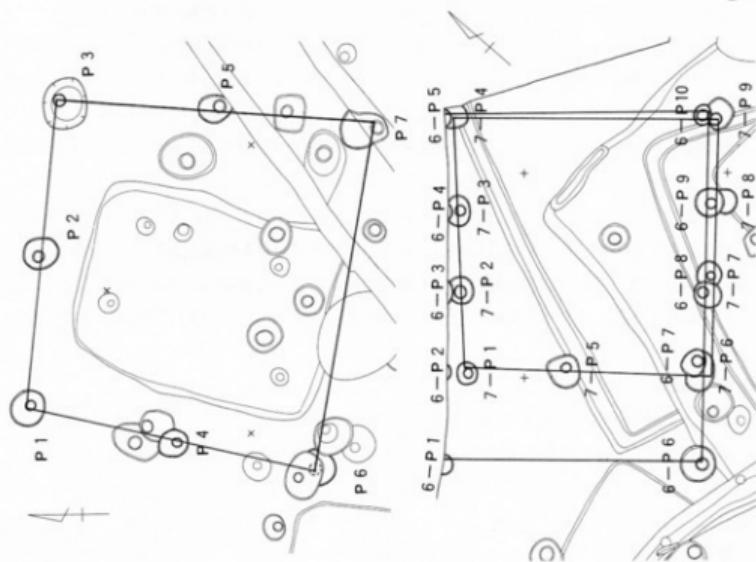
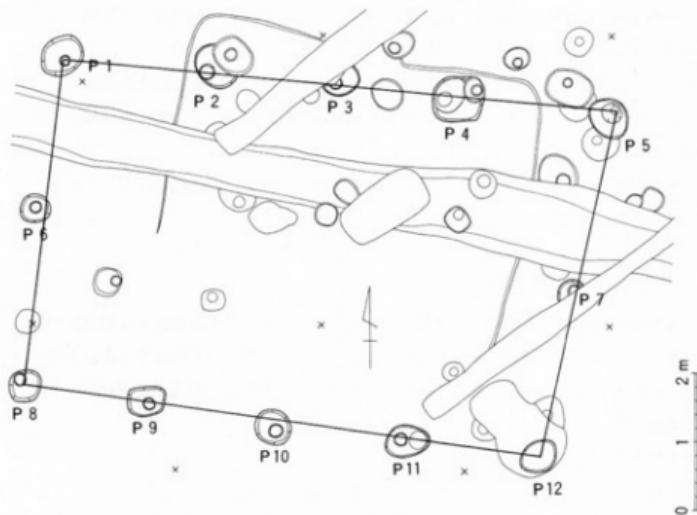
〔位置〕 東調査区西部E-9・10で第1号掘立柱建物の東側に位置している。

〔重複〕 第19・20号住居を切っており、第6号掘立柱建物に切られている。



柱番号	主 色	土 性	備
P1-1号	107 R 3/1	黒褐色	砂
P2-1号	107 R 2/2	黒褐色	砂
2号	107 R 3/2	黒褐色	砂
P3-1号	107 R 2/2	黒褐色	砂
2号	107 R 2/6	黒褐色	砂
3号	107 R 3/1	黒褐色	砂 黄褐色合む
4号	107 R 3/1	黒褐色	砂
P4-1号	107 R 3/1	黒褐色	砂
2号	107 R 2/2	黒褐色	砂
P5-1号	107 R 3/2	黒褐色	砂
2号	107 R 3/2	黒褐色	砂
3号	107 R 2/2	黒褐色	砂
P6-1号	107 R 3/1	黒褐色	砂
2号	107 R 3/2	黒褐色	砂
P7-1号	107 R 3/1	黒褐色	砂
2号	107 R 3/1	黒褐色	(3/2黒褐色合む)
P8-1号	107 R 3/1	黒褐色	砂
2号	107 R 3/1	黒褐色	(1層より嬉しい)
P9-1号	107 R 3/1	黒褐色	砂

第28図 第3号掘立柱建物跡



第29図 第4号・5号・6号・7号据立柱建物跡

〔規模〕 桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟である。桁行は北側柱列で総長 3.78m、南側柱列で総長 3.62m である。柱間は北側柱列で 1.20、1.20、1.38m、南側柱列で 1.28、1.14、1.20m である。梁行は西側柱列で総長 3.36m、東側柱列で総長 3.66m である。柱間は西側柱列で 1.44、1.92m、東側柱列は間の柱が検出されていないので不明である。

〔柱穴〕 柱穴は一辺が 32~44cm の方形ないし梢円形を呈している。柱根跡はほとんどのものに認められており、径が 14~20cm、深さが 8~33cm で円形を呈している。東側柱列の間の柱穴は攪乱によって壊されている。

〔埋土〕 埋土は 2~4 層で、主に黒褐色砂層であり、一部に褐色粘土層がみられる。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

4. 溝 跡

溝跡は東調査区で約 50 条、西調査区で 4 条が検出された。東調査区では調査区中央に「く」の字状を呈している第 4 号溝跡と北側および南東部・北西部の 3 箇所で小溝群が検出された。

西調査区では平坦部で 3 条の小溝と西側傾斜部の斜面上部で大溝 1 条が検出された。

【東調査区】

第 4 号溝跡

〔位置〕 東調査区中央を東西に横切っている。地山面で確認された。

〔重複〕 第 3 号住居・第 8 号住居・第 13 号住居を切っており、第 5 号溝に切られている。

〔形態・規模〕 調査区の中央を東西に横切り、東側で南にはほぼ直角に曲がっている。西側は溝が浅くなり、耕作等の削平・攪乱により消滅している。幅は約 1m、深さ約 30cm であり、断面形は底部がほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がっている。

〔堆積土〕 自然堆積で、暗褐色シルト質砂でつまり・粘性が弱い層と黒褐色シルト質砂で地山砂を含んでおり、つまり・粘性がややある層の 2 層からなる。

〔出土遺物〕 土師器坏・甕・須恵器坏・高台付坏・甕などが出土している。土師器坏は内黒で口縁部近くにかるい稜をもち口縁部が外反する。高坏と思われる脚部があり、坏部接合付近に梢円形の孔が穿ってある。須恵器坏の切り離しは回転糸切りと回転ヘラケズリ調整である。高台付坏は体部下端に稜をもち外反しながら立ち上がっている。体部下端は回転ヘラケズリが施されている。

北側小溝群

〔位置〕 東調査区北部 E・F-11 付近に位置している。

〔重複〕 第 16 号・17 号・18 号・22 号・23 号住居および第 2 号土壤を切っている。

〔形態・規模〕 ほぼ南北方向で、残存長は 3~5m、幅が 18~60cm、深さ約 6cm 前後である断面形は「U」字状を呈している。

〔堆積土〕 堆積土はいずれもつまりが弱く、粘性がない黒褐色ないし暗褐色砂の 1 層からなる。自然堆積である。

〔出土遺物〕検出されなかった。

南東部小溝群

〔位置〕東調査区南東部H・I-9・10に位置している。

〔重複〕第6号・7号・12号住居および10号土壙（井戸）に切られている。

〔形態・規模〕住居や耕作による削平等により不明なところがあるが、残存長は3~8m、幅は20~30cm、深さ3~10cmで断面形は「U」字状を呈している。

〔堆積土〕堆積土はいずれもしまり・粘土性が弱い黒褐色砂の1層からなる。自然堆積である

〔出土遺物〕検出されなかった。

北西部小溝群

〔位置〕東調査区北西部D・E・F-7・8・9に位置している

〔重複〕なし

〔形態・規模〕未発掘の部分があり全体の形態は不明な点もあるが、溝の長さ約3.5m前後、幅が20cm前後、深さが5cm前後で断面形は「U」字状を呈している。

〔堆積土〕堆積土はいずれも黒褐色砂でしまり・粘性が弱い1層からなる。

〔出土遺物〕検出されなかった。

これらの小溝は長さ・幅・深さ・方向・間隔等がほぼ一定であるまとまりが5群確認された。

1つの小群の範囲は約3.5×4.0mであり、歴跡の可能性があると考えられる。

【西調査区】

第1号溝跡

西調査区中央C-5に位置し、擾乱によって切られている。トレント掘のため全体形は不明である。残存長は約3m、幅約70cm、深さ約8cmで断面形は「U」字状を呈している。堆積土は黒褐色シルト質砂の自然堆積土が1層確認されたのみであり、遺物は検出されなかった。

第2号溝跡

西調査区東側B-D-6に位置し、第3号溝や土壙・擾乱に切られている。溝はグリッドにはほぼ平行に南北方向に延びており、残存長約24m、幅約70~80cm、深さ約5cm前後で断面形は「U」字状を呈している。堆積土は黒褐色砂の自然堆積土が1層確認されたのみであり、遺物は検出されなかった。

第3号溝跡

西調査区東側B-6に位置し、擾乱によって切られ第2号溝を切っている。溝は東西方向に延びておらず、残存長約4m、幅約50cm、深さ約5cm前後で断面形は「U」字状を呈している。堆積土は黒色砂の自然堆積土が1層確認されたのみであり、遺物は検出されなかった。

第4号溝跡

西調査区西側D-E-4に位置し、土壙・ピット等に切られている。溝は地山面の落ち込みのラインに沿って南北方向に延びており、残存長は約11.5m、幅約2.5m、深さ5~10cmであ

り、溝の残りはあまり良くなく壁の立ち上がりは不明瞭であるが、底面がほぼ平坦で壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。堆積土は黒褐色砂の自然堆積土が1層確認されたのみであり、遺物は検出されなかった。

溝の幅が他の溝より広く、地山面の落ち込み際に位置していることから区画溝の可能性も考えられるが、残りがあまり良くないので断定できない。

5. 土壙・井戸跡

精査の段階で土壙番号をつけたが、後に井戸跡になったものがあるので、土壙と井戸跡を併せて説明を行う。東調査区では土壙が21基、井戸と思われるものが3基が確認され、西調査区では土壙が6基、井戸と思われるものが1基確認された。

【東調査区】

第1号土壙

〔位置〕 東調査区南側I-10で、第6・7号住居の南側に位置し、地山面で確認された。〔重複〕 第7号・8号土壙を切っている。

〔形態・規模〕 平面形は梢円形を呈しており、長軸約2.82m、短軸約2.36m、深さ約30cmである。底面はやや平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。壁、床面は地山からなる。

〔堆積土〕 堆積土は灰黄褐色・褐灰色・暗褐色等で砂質シルト層の5層からなる。1~3層には炭化粒を僅かに含んでおり、4・5層には灰白色土を含んでいる。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕 遺物は各層および底面から土師器壺・壺・器台・手捏ね土器が出土している。壺の外面調整はハケメ調整、ハケメの後ミガキ調整等が施されており、壺は複合口縁で外面ミガキ調整が施されている。器台は貫通孔が壺底部と脚部に3つ見られる。

第2号土壙

〔位置〕 東調査区北側E-11で第17号住居等の北側に位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 平面形は径約1.50mのはぼ円形を呈しており、深さは約65cmで底面は丸みをおり、壁は外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 黒褐色砂および褐灰色砂等の自然堆積土4層からなる。層中には炭化物および遺物の混入が認められる。

〔出土遺物〕 1層より土師器・須恵器の破片が検出され、3・4層からは土師器器台が出土している。遺構確認面直上まで攪乱がおよんでいるので、1層出土の遺物は混入したものと考えられる。器台は貫通孔が壺底部と脚部に3つ見られる。

第5号土壙

〔位置〕 東調査区東側I-12で第3号住居の北側に位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 平面形は長軸約2.12m、短軸約1.35mの梢円形を呈している。深さは約28cmで

断面は底面が丸みがあり、壁は底面より緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 暗灰褐・黄灰白・黄褐色砂の3層からなる。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕 東側壁面より土師器壺が1点出土している。外面はハケメ調整の後ミガキ調整が施されており、口縁は複合口縁である。

第6号土壤

〔位置〕 東調査区東側I-12で第5号土壤の北側に位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 平面形は西側が直線であるが東側が丸みをおびている不整形を呈している。規模は長辺約1.28m、短辺約1.10mである。深さ約23cmで底面は丸みをおび壁は緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 堆積土は黒褐色砂層とオリーブ褐色砂層の2層である。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第12号土壤

〔位置〕 東調査区北側E-11で第13号土壤の北側に位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 平面形は長軸約1.60m、短軸約1.55mのはば円形を呈している。断面形は深さ約40cmで底部は丸く壁は緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 黒色砂、黒褐色砂、黒色シルト質砂の3層の自然堆積土からなる。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第13号土壤

〔位置〕 東調査区北側E-11で第12号土壤の南側に位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 平面形は長軸約1.26m、短軸約1.18mのはば円形を呈している。断面形は深さ約35cmで底部は丸く壁は緩やかに立ち上がっている。

〔出土遺物〕 検出されなかった。

第17号土壤

〔位置〕 東調査区西側G-8に位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 平面形は長軸約80cm、短軸約50cmの楕円形を呈している。断面形は深さ約26cmで底面が丸く壁が緩やかに立ち上がっている。

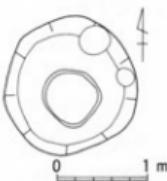
〔出土遺物〕 土師器壺・甕が検出された。

第9号土壤(井戸跡)

〔位置〕 東調査区中央部G-9・10に位置している。

〔重複〕 第10号住居に切られている。

〔形態・規模〕 平面形は、径約1.56mの円形で、一本の木をくり抜い



第30図 第9号土壤(井戸跡)

た、径約64cmの円形を呈した井戸枠を検出した。

〔堆積土〕自然堆積で黒褐色砂などが確認されたが、堆積土が砂のため底面まで掘ることが出来なかった。

〔出土遺物〕土師器壺・甕などが検出された。壺は複合口縁で外面にハケメ調整が施されている。

第10号土壤（井戸跡）

〔位置〕東調査区南部H-9・10で第12号住居の北側に位置している。

〔重複〕南東部小溝群の溝を切っている。

〔形態・規模〕平面形は径約1.58mの円形を呈しており、井戸枠は一辺約60cmの方形を呈している。井戸枠は幅約15cmの板材を組み合わせたものである。

〔堆積土〕黒褐色砂を確認したが、湧水のため底面まで掘り下げることが出来なかった。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の小破片が検出された。

第11号土壤（井戸跡？）

〔位置〕東調査区北側E-10で第13号土壤の西側に位置している。

〔重複〕第19・20号住居を切っている。

〔形態・規模〕平面形は長軸約2.88m、短軸約2.74mのほぼ円形を呈している。遺構内には約20cm前後の石が円形に巡っていることから、井戸の可能性が考えられる。

〔堆積土〕黒褐色シルト質砂の自然堆積土のみ確認された。

〔出土遺物〕検出されなかった。

【西調査区】

第1号土壤

〔位置〕西調査区西側D-4に位置している。

〔重複〕ピットを切っている。

〔形態・規模〕平面形は長軸約2m、短軸約1.50mの梢円形を呈しており、断面形は深さ約80cmで底面は丸みがあり壁は外反しながら立ち上がっている。

〔堆積土〕黒褐色砂質シルトでしまりがややあり粘性が弱い堆積土が確認された。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の破片が僅かに検出された。

第2号土壤

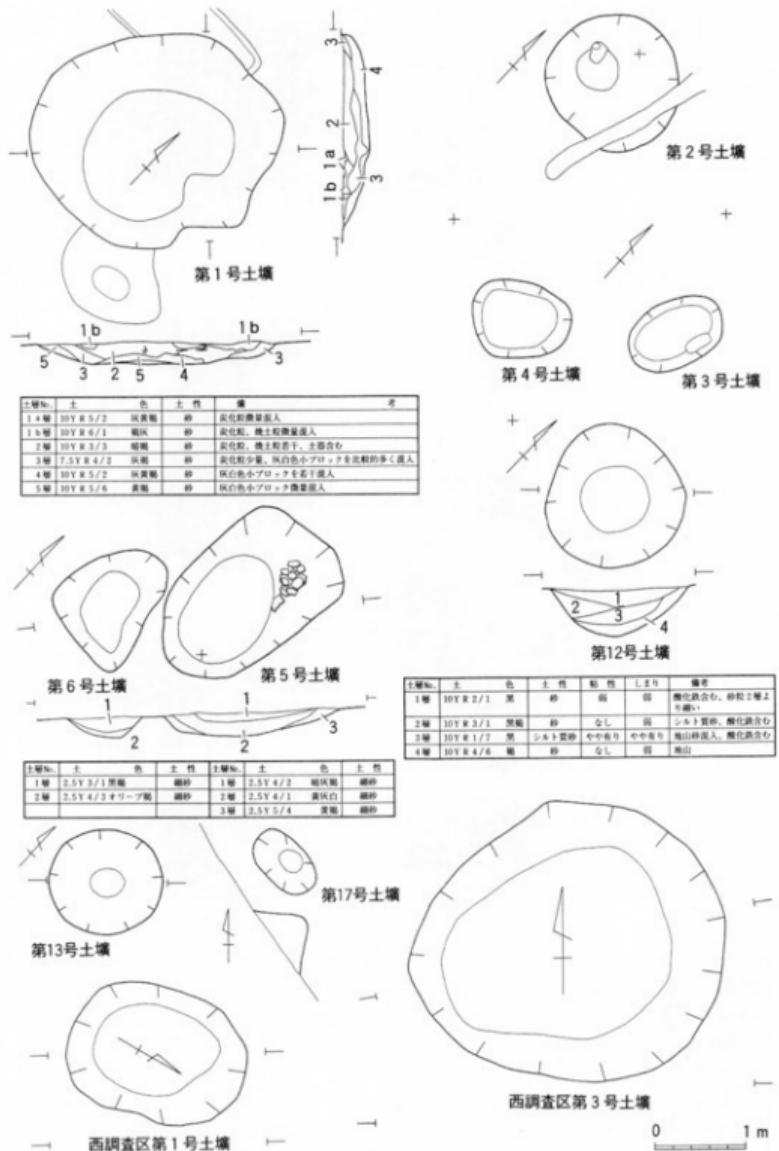
〔位置〕西調査区南側D-5に位置している。

〔重複〕認められなかった。

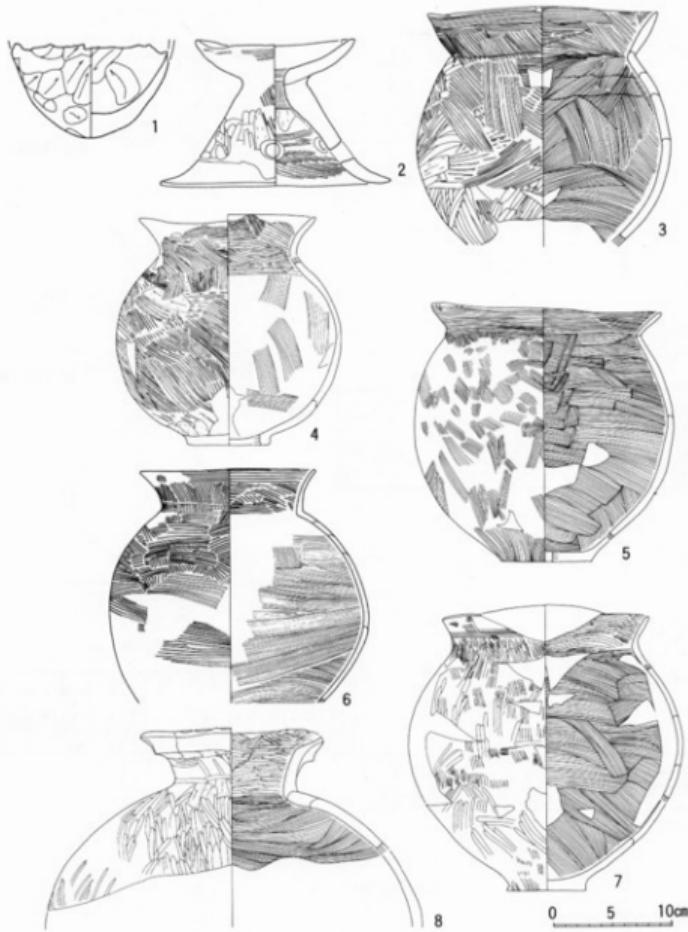
〔形態・規模〕平面形は長軸約1m、短軸約50cmの梢円形を呈しており、断面形は深さ約18cmで底面は丸みがあり壁は緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕褐色砂の自然堆積土が確認された。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の破片が僅かに検出された。

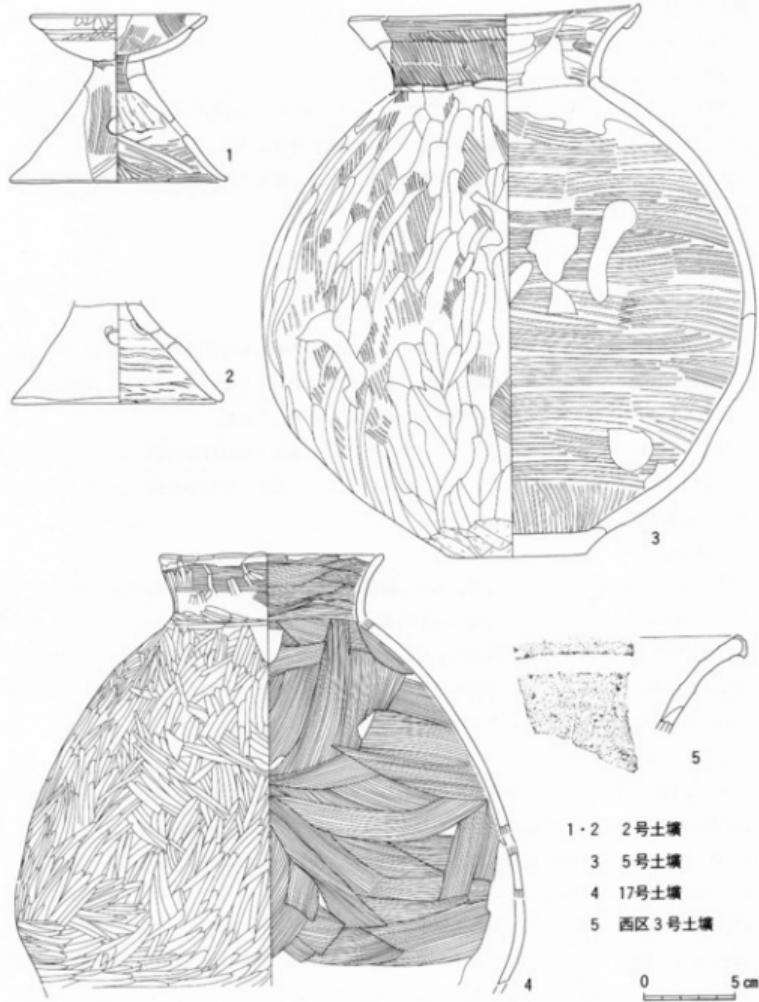


第31図 東調査区・西調査区土壤



番号	標 題	外 面 観 察	内 面 観 察	厚さcm	口徑cm	底径cm	備 考	写真位置
1	土被部手前	ナダ	ナダ	(3.6)	—	—	—	—
2	土被部側面 [前後]ヨコナデ [横]ハケメ→ハラケズリ→ハ ガキ	[前後]ヨコナデ [横]ハケメ→ハラケズリ→ハ ガキ	[横]ハラケズリ、ハラナデ、ハケメ	8.2	9.0	13.0	1/3欠損	58
3	土被部裏	[左]ヨコナデ→ハケメ [横上]ハケメ→イガキ [横下]ハラケズリ→セキキ→ハラケズリ	[左]ヨコナデ→ハケメ [横]ハラナデ	(14.8)	34.1	—	1/3残存	59
4	土被部裏	[左]ヨコナデ→ハラケズリ→ハ タメ [右]ハラケズリ→ハ タメ	[左]ハラケズリ→ハ タメ [右]ハラケズリ→ハ タメ	19.3	34.9	7.0	1/4欠損	—
5	土被部裏	[左]ヨコナデ [右]ナダ [右]ナダ	[左]ヨコナデ [横]ハラナデ [横]ヘク ナダ	21.8	39.4	7.6	—	—
6	土被部裏	[左]ヨコナデ→ハケメ [右]ハケメ	[左]ハラケズリ→ハ タメ [右]ハラナデ	(19.6)	34.8	—	底面欠損	61
7	土被部裏	[左]ハケメ→ヨコナデ [右]ハケメ→イガキ [右]ハケメ→イガキ [右]ハケメ→イガキ	[左]ハラケズリ→ハ タメ [右]ハラナデ	23.4	(37.4)	6.7	1/3残存	63
8	土被部複合 [口 線 帯]	[左]イガキ→ハケメ [右]イガキ [右]ハラケズリ→イガキ	[左]イガキ→ハケメ [右]イガキ [右]ハラケズリ	(25.0)	35.4	—	口被部→側上半部残存	60

第32図 第1号土壤出土遺物



1・2 2号土壤

3 5号土壤

4 17号土壤

5 西区3号土壤

番号	種別	外観調査	内観調査	基高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	土壤器物合 口解き	(基) ヒガキ (肉) ナメ	(部分) ナメ (肉) ハラケヅリ、ハケメ	9.2	9.8	12.0	1/4 稲舟 第2号土壤出土	46
2	土壤器物合 口解き	(肉)	ナメ	(5.4)	—	11.7	脚部のみ残存 第2号土壤出土	45
3	土壤器物合 口解き	(口) ヨコナメ→ハケメ (肉) ハケメ (肉) ハケメ→ヒガキ (肉) ハラケヅリ ガキ (肉) ハケメ (肉) ハラメ	(口) ハケメ→ミガキ (肉) ハケメ→ヒ ガキ (肉) ハケメ (肉) ハラメ	30.2	16.2	—	第5号土壤出土	47
4	土壤器物	(口) ヨコナメ→ヒガキ (肉) ヒガキ	(口) ヨコナメ→ヒガキ (肉) ヘラナメ	(24.0)	12.3	—	口縁部一側上半部両存第17号土壤出土	48
5	候色器物	(口) ロクロ→液状化織	(口) ロクロ	—	—	—	—	49

第33図 土壤出土遺物

第3号土壤（井戸跡？）

〔位置〕西調査区南東部D-7に位置している。

〔重複〕遺構東側が擾乱等によって切られている。

〔形態・規模〕平面形は北側がやや外に出ているが径約3mの円形を呈している。断面は約1.60m掘り下げたが湧水のため完掘出来なかったため不明瞭である。

〔堆積土〕黒褐色砂質シルトでしまりがあり、粘性が強い層とスクモ層が確認されたが湧水のためそれ以上は確認出来なかった。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の破片が検出された。

6. その他の遺物

調査区内は遺構確認面直上まで擾乱が及んでおり、遺構外から多くの遺物が出土している。

古墳時代の遺物は土師器壺・高壺・器台・甕・壺などが出土している。遺物は西調査区からほとんどの検出されなかつたが、東調査区では全域から検出された。

奈良・平安時代の遺物は土師器壺・蓋・甕など、須恵器壺・高台付壺・甕・蓋などが出土しており、他に土錐なども出土している。これらの遺物は、調査区全域から検出されているが、やはり東調査区から多く検出されている。

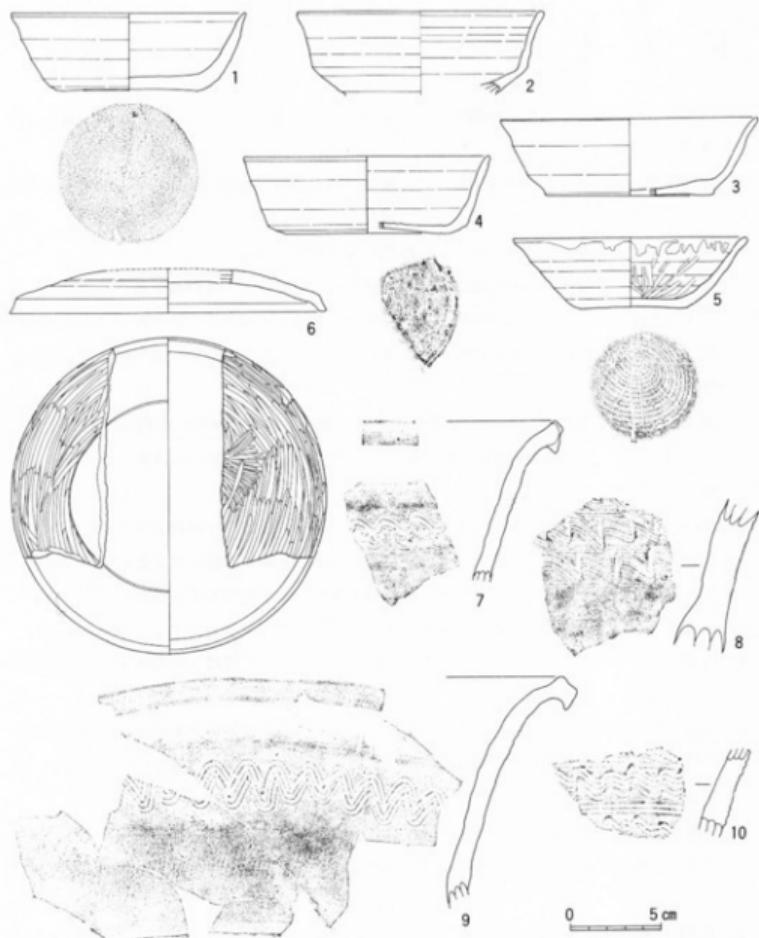
〔古墳時代〕

壺は平底の壠状を呈しているもの、高壺は脚部の上部が円柱状で中・下部が円錐台状を呈しているものが出土している。器台は脚部が円錐台状を呈した、3つの円窓のものが出土している。甕は胴部が球形を呈した、外面調整がハケメのものとケズリのものが出土した。壺は壠状を呈する小型のものと複合口縁で外面調整がミガキのものやハケメのものが出土している。遺物の時期はいずれも塙釜式のものと考えられる。

〔奈良・平安時代〕

壺は土師器の丸底のものと平底のものがあり、いずれも内黒処理のものである。丸底のものは有段のものと無段のものがあり、いずれも非ロクロ使用である。平底のものはロクロ使用のものである。須恵器の壺は回転糸切り無調整のもの、回転ヘラ切りのもの、糸切り後に回転ヘラケズリのものなどが出土している。蓋はいずれもツマミ部を欠損している。土師器の蓋は1点のみであるが内、外面ともに黑色処理が施されている。甕は土師器がいずれも長胴で、外面調整が口縁部がヨコナデで体部がヘラケズリの非ロクロのものと口縁部および体部上半がロクロ調整で下半がヘラケズリのものが出土している。土器型式としては、非ロクロのものが国分寺下層式で、ロクロ使用のものが表杉ノ入式であると考えられる。

奈良・平安時代の土器のおおくはE-10グリッド付近から出土しており、非ロクロのものは第14号住居跡から出土した土器と接合したものもある。ロクロ使用のものは、第1号掘立柱建物の遺物の可能性も考えられる。



番号	種別	外観調査	内観調査	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真回数
1	磁器	ロクロ (体側下端・底部) 指輪・ハラケズリ	ロクロ	4.25	12.9	7.7	第4号溝	49
2	磁器	ロクロ→圓輪ハラケズリ	ロクロ	14.61	(13.40)	(8.40)	第4号溝	—
3	磁器	ロクロ	ロクロ	4.3	14.2	9.3	西区第2号溝	—
4	磁器	ロクロ→圓輪ハラケズリ (裏) 深切り→圓輪ハラケズリ	ロクロ	4.2	13.6	9.0	D-6出土	71
5	土器	ロクロ (裏) 回転水切口 「木」 ハラ蓋き	ロクロ→セキ→黑色地埋	3.9	12.9	5.8	E-10出土	72
6	土器	1セキ→黑色地埋	1セキ→黑色地埋	(2.30)	17.4	—	1-9出土	75
7	土器	ロクロ→直孔洗継	ロクロ	—	—	—	E-11出土	80
8	土器	直孔洗継+子口洗継	ナシ	—	—	—	F-17出土	76
9	土器	平行切口→直孔洗継	ロクロ	—	—	—	E-10B2土	79
10	土器	波状洗継+子口洗継	ナシ	—	—	—	表様	81

第34図 溝・その他の遺物

IV ま と め

1. 田道町遺跡C地点は石巻市田道町一丁目から二丁目にかけて所在し、標高1.5m～1.8mの沖積平野の微高地上に立地している。
2. 発掘調査は東調査区と西調査区に分け、東調査区に遺構が集中しているのでグリッドを設定して全面発掘し、西調査区はトレーンチ掘りを行った。
3. 本遺跡は、古墳時代前期、奈良・平安時代の複合遺跡である。
4. 発見された遺構は、古墳時代では竪穴住居跡9軒、土壙5基、井戸跡1基が確認され、奈良・平安時代では竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡7棟、土壙2基、井戸跡1基、溝跡多数確認された。その他時代不明の竪穴住居跡10軒、土壙24基、井戸跡1基、溝跡多数が確認された。
5. 出土遺物は、古墳時代前期の土師器坏・高坏・甑・器台・甕・壺・手捏ね土器・土製品（土鍾）など、奈良・平安時代の土師器坏・甕・土製品（土鍾・紡錘車）、須恵器壺・甕・蓋などである。
6. 古墳時代前期の竪穴住居跡のうち第1・3・8・18号住居跡の4軒は火災住居であり、各住居内から炭化材が検出された。また、第18号住居跡を除いた他の住居跡からは、遺物が少量しか検出されなかったことから、故意に火をつけた可能性も考えられる。
7. 古墳時代前期の第9号住居跡から塩釜式期の遺物が一括して多数出土している。
8. 古墳時代前期（塩釜式期）の井戸跡が1基検出された。井戸枠は一本の木をくり抜いたものであった。
9. 奈良・平安時代の住居跡から出土した遺物は丸底で非ロクロ使用のもの（国分寺下層式）の時期と非ロクロ使用とロクロ使用が混在する時期のものがあり、掘立柱建物跡はすべて住居跡を切っている。出土遺物もロクロ使用のもの（表杉ノ入式）である。
10. 東調査区中央を東西に横切り東端で南にはば直角に折れ曲がっている溝跡を検出し、溝跡の規模・形態から区画溝の可能性が考えられるが、どの遺構を区画しているか現段階では不明である。
11. 本遺跡の時期区分は古墳時代前期（塩釜式期）2～3時期、奈良・平安時代の住居跡が3時期、掘立柱建物跡が3時期に区分される。
12. 東調査区の東端から地山面が落ち込んでおり、また、西調査区の西端から地山面が落ち込んでいる。遺構はこれらの間の平坦面にあり、特に住居跡・掘立柱建物跡は東側に集中している。他の溝や土壙は平坦面全域に見られるが、やはり東側で多く見られる。

V 写 真 図 版



B・C・D・E-4 グリッド

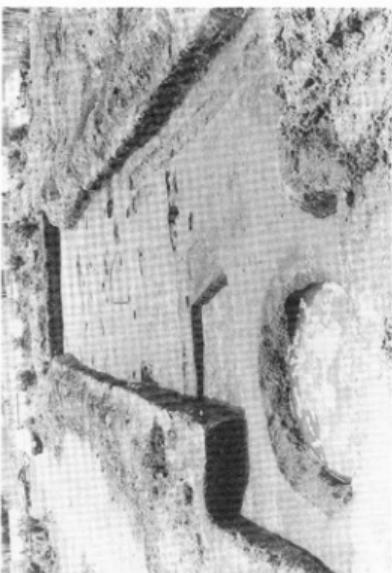


B・C-5 グリッド

B・C-6 グリッド



D-4・5・6・7 グリッド



西調査区各トレンチ

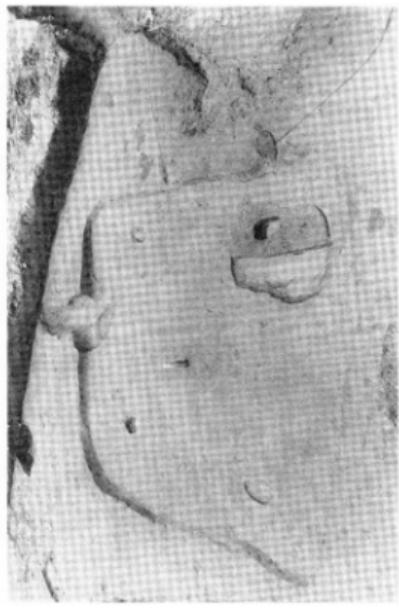
第2号住居跡

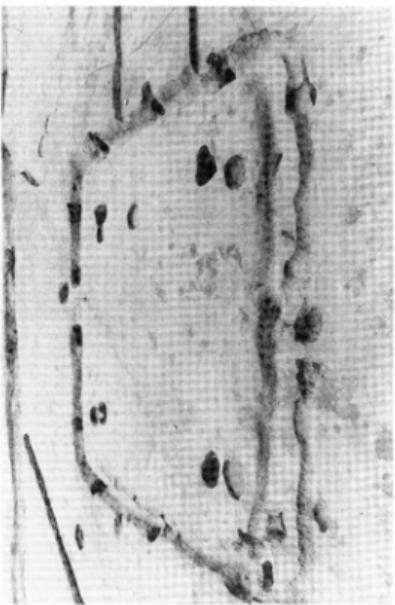


東調査区完掘状況

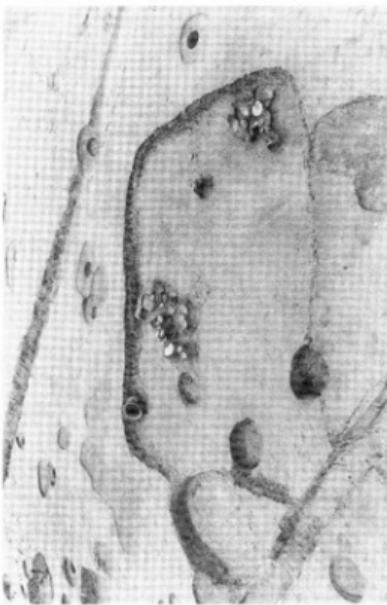


第1号住居跡





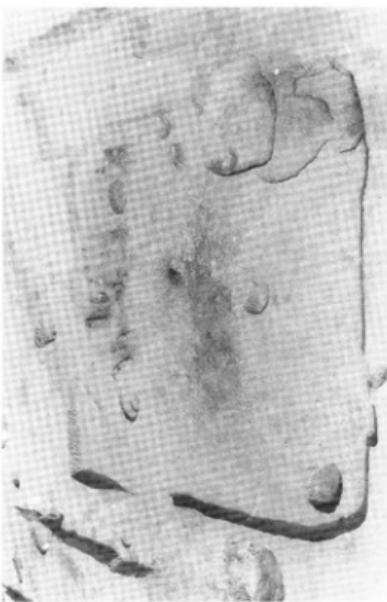
第6·7号住居跡



第9号住居跡



第3号住居跡



第8号住居跡

第16号住居跡



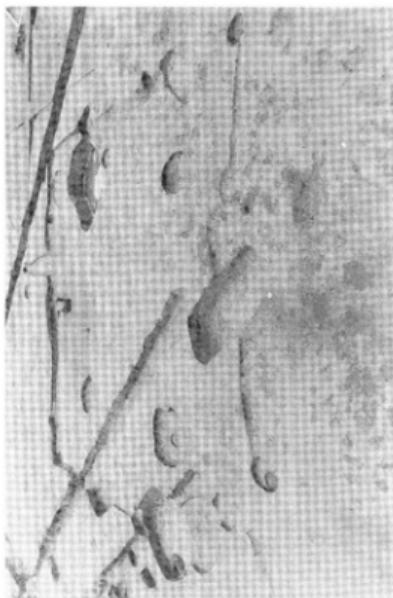
第11号住居跡



第14・15号住居跡



第10号住居跡

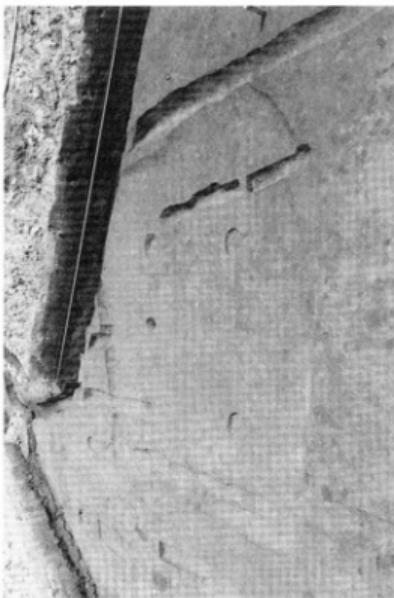




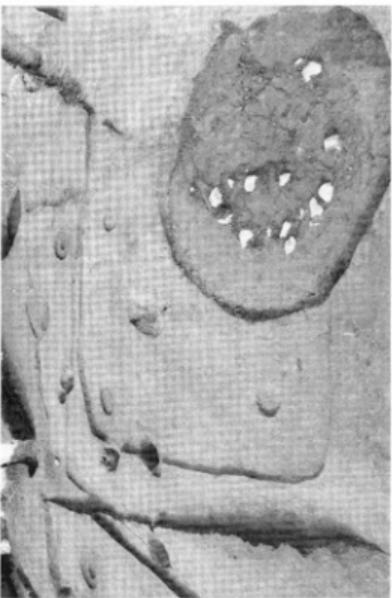
第18·22·23号住居跡



第21号住居跡



第17号住居跡



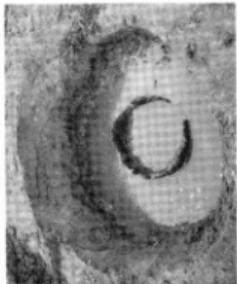
第19·20号住居跡



第4号振立柱建物跡



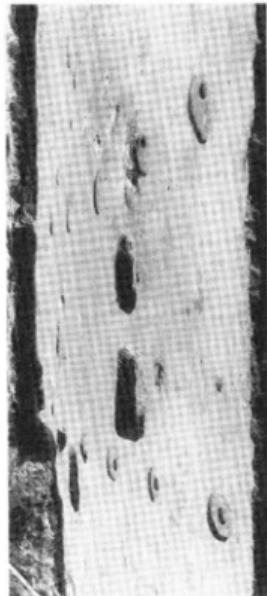
第1号土壤



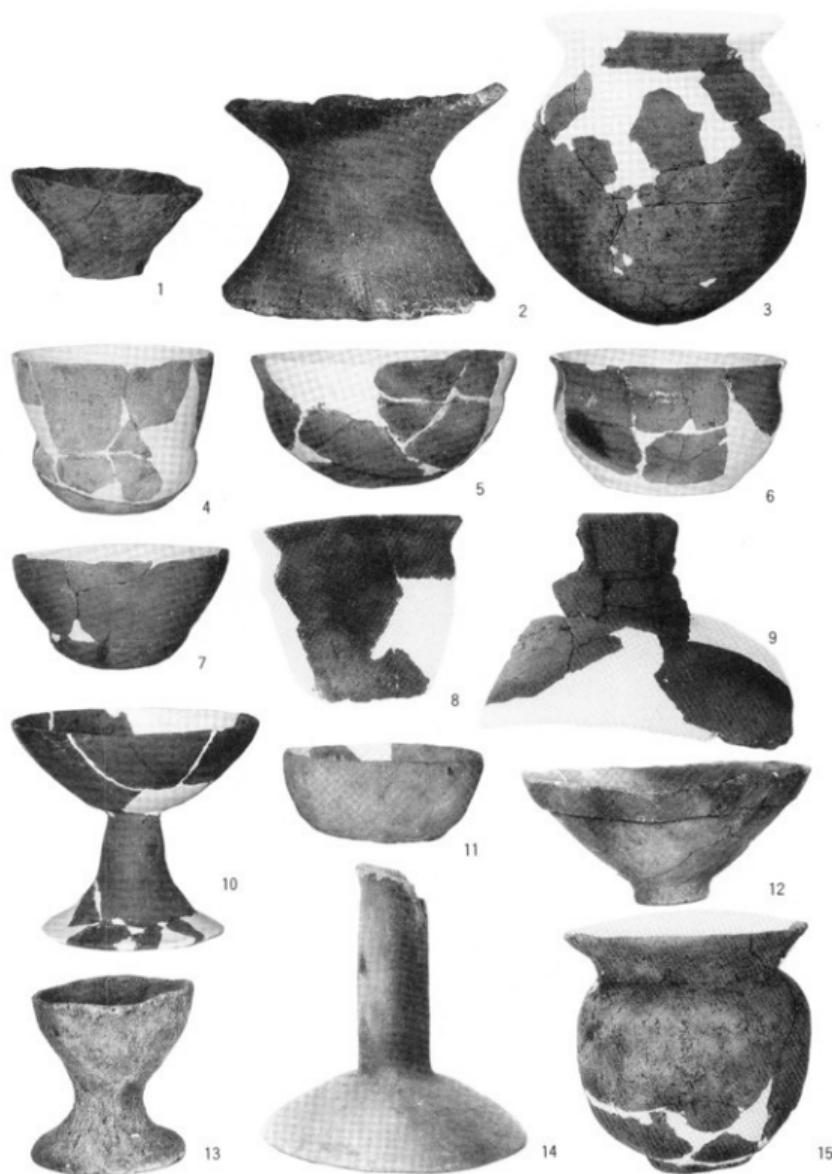
第9号土壤(井戸)



第5・6号土壤



第1号(上)、第2号(中)、第3号(下)振立柱建物跡

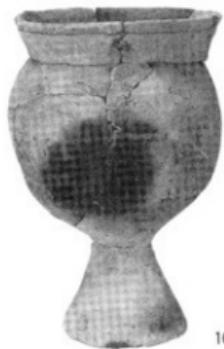


1~3 1号住居跡

4~9 3号住居跡

10 8号住居跡

11~15 9号住居跡



16



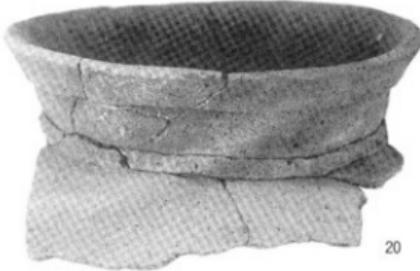
17



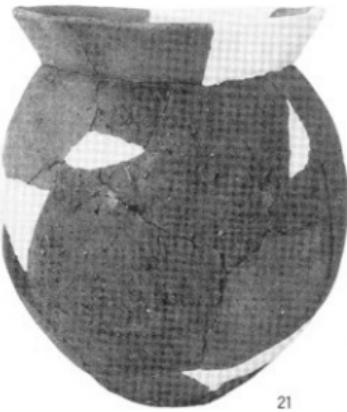
18



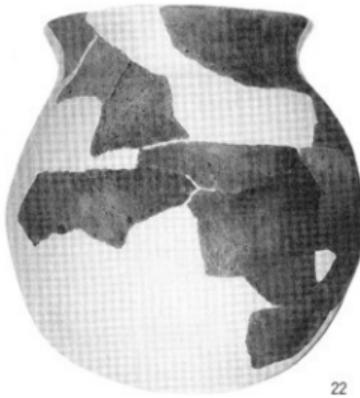
19



20

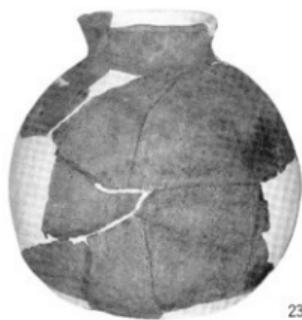


21

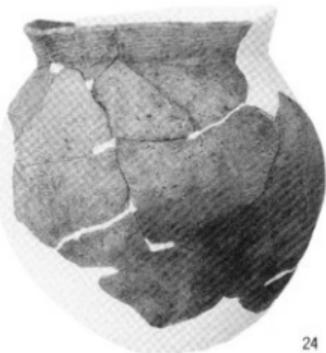


22

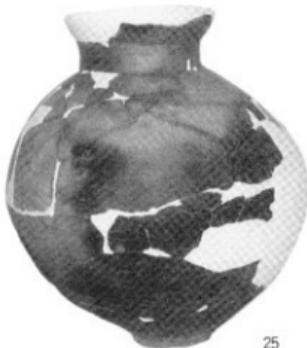
16~22 9号住居跡



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36

23~25 11号住居跡

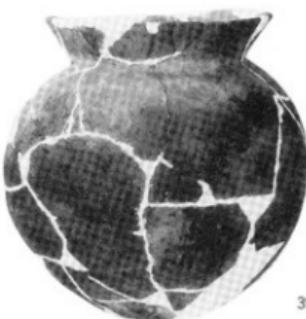
26~36 14号住居跡



37



38



39



40



41



42a



43



44



45



46a



47



48a



49



50



51



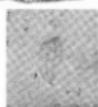
52



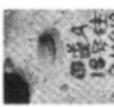
53



54



42b



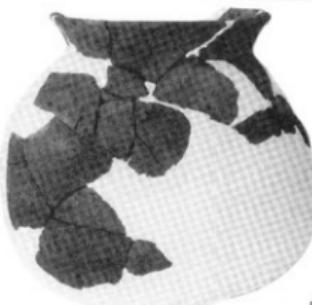
46b



48b



55



56

37 14号住居跡

38・39 16号住居跡

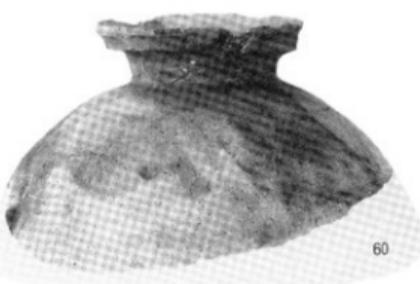
40~56 18号住居跡



57



58



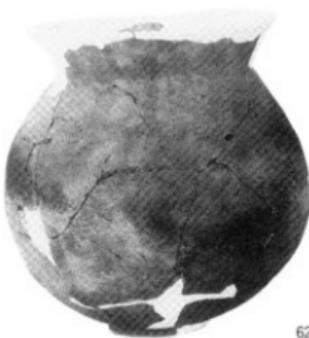
60



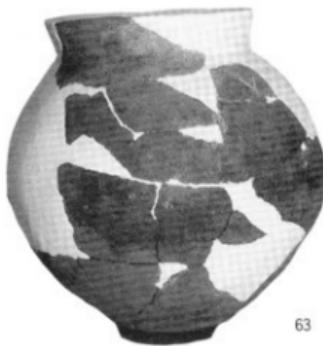
59



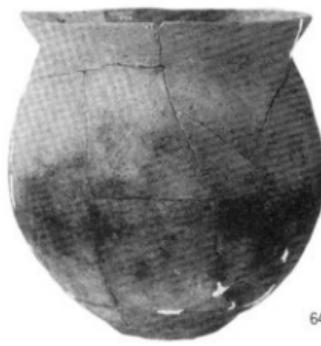
61



62

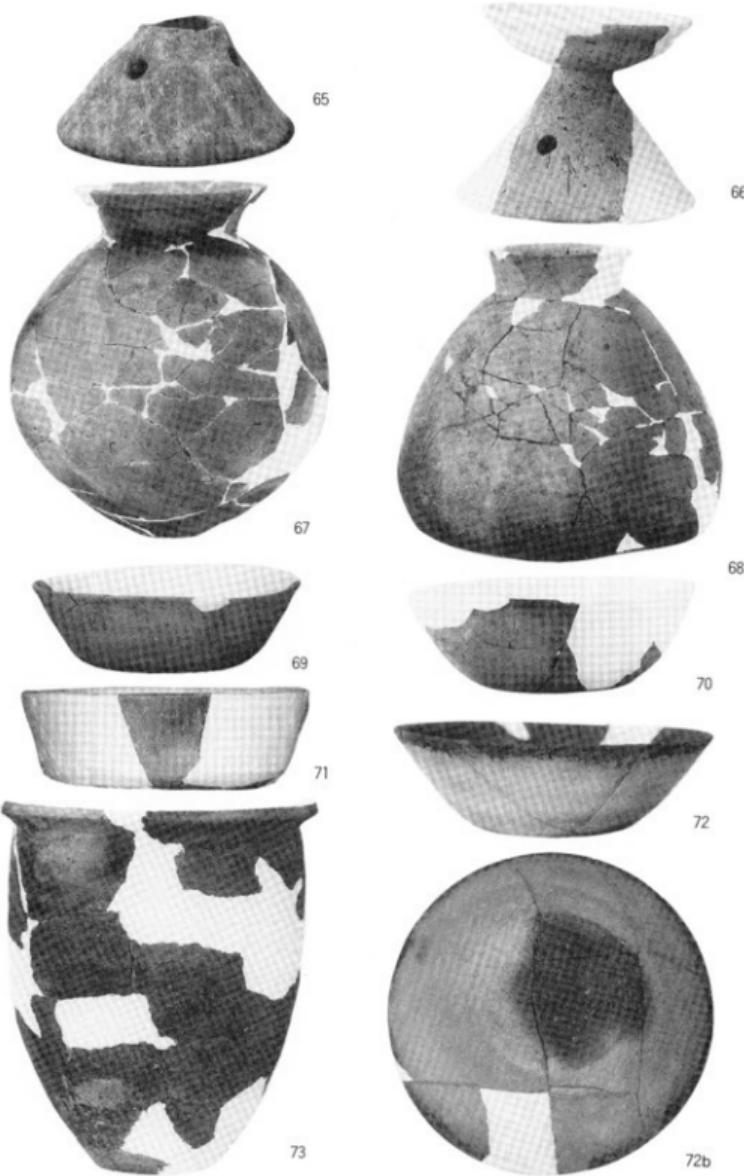


63



64

57 19号住居跡 58~64 1号土壤



65 · 66 2号土壤

69 · 70 4号溝跡

67 5号土壤

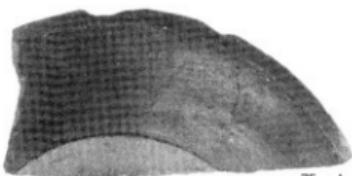
71 D-6

68 17号土壤

72 · 73 E-10



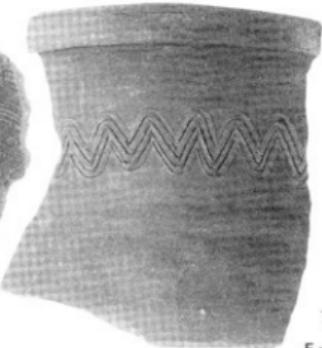
74 G-9



75 I-9



76 F-12



77
E-10



78
E-11



79 E-10



80
E-11



81 表採



82 西区 3号土壤

石巻市文化財調査報告書第4集
田道町遺跡 — A地点発掘調査概報 —

1992(平成4)年8月31日発行

編集 石巻市教育委員会
発行 石巻市教育委員会
〒986 宮城県石巻市日和が丘一丁目1番1号
☎ 0225-95-1111㈹
印刷 株式会社 鈴木印刷所
〒986 宮城県石巻市蛇田字新谷地前121
☎ 0225-22-4101㈹
